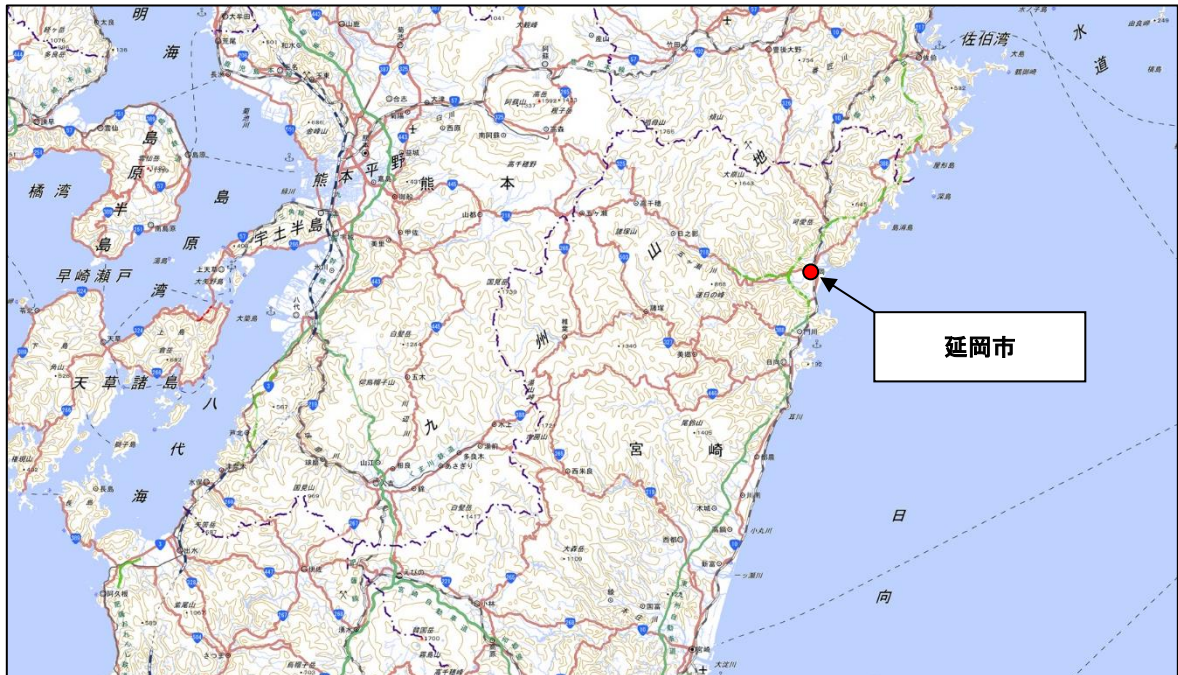


年号：1721 年

月日：7 月 26 日～31 日

災害名：大雨の概要

宮崎県延岡市位置図



出典：国土地理院

【江戸時代の水害史】

『・石川恒太郎編“五ヶ瀬水系の水害史”より

◎有馬氏時代、慶長十九年＝元禄五年（西一六一四＝一六九二）の記録「国乗遺聞」によると、洪水の状況を次のように書いてある。

「^{あがた}県地形高千穂肥後境まで十五、六里はあり、又、祝子川祝子村迄六里、又、八戸川（今の北川）本流豊後境まで八里右三河の奥山大雨降りぬれば三ヶ所の大川満水にて港口一ヶ所に落合ける。港口の幅五・六町の処水を吐ききらずして溢れる水は浜の山南、毛なし浜と云処を打越ゆる。御城内より恒富、岡富、粟之名、浦々水たたゆる処第一なり」

・これは、有馬氏が延岡城主であった時のことを書きとめた書物であり、延岡にはなく有馬氏が転封して行った福井県丸岡町に残っている。

◎牧野氏時代の記録（牧野家史による）

- ・享保六年（西一七二一）七月三日より延岡大風雨に満水御損毛御届八月十五日差出、高一万九千六百六十八石八斗余
- ・享保七年六月二十二日、延岡雨降続、二十三日、二十四日満水にて御損毛御届、高三万六千五百二十四石六斗余
- ・同九年八月十四日より延岡大風雨、十六日満水に付御損毛御届、九月二十一日御差出、高一万六千七百七十石余
- ・同十年十二月御領分御損毛御届御差出、高二万二千五百七十六石余
- ・これは、水害による被害高を幕府に届け出たものである。享保六年から同十年までの五ヶ年間に蒙った水害の損毛高は九万五千五百三十九石四斗余りとなる。この五ヶ年間に享保八年を除いて毎年水害を蒙っている。
- ・この五ヶ年間の水害による損毛高は、東西臼杵群と宮崎群との二ヶ年間の生産高に当る。

◎内藤氏時代、延享四年～明治四年（西一七四七～一八七一）

- ・内藤氏が岩城平より延岡に来るや先ず洪水に対し左の如き規定をなした（旧記書抜）
- ・寛延元年（西一七四八）八月十日
- ・洪水之節手当左之通り
- ・一、船通路留出番難到節は両御番所共代り之物出勤迄は詰切被仰付候、但詰切御賄可被下候
- ・一、満水に而面々居住に家族共難差置節は最寄之水付無之所へ乍計前広に可引取候、但本小路桜小路辺は御本城へ可引取候、尤於御門出役之御目付竝に御徒目付へ相届御本城へ可被通候
- ・一、退後候有之時之ため兼而助船被仰付置候右助船之儀は御船手より御城内へ桜橋迄三艘、北小路へは元町より三艘、新小路へは柳沢町より三艘差出候筈に候間一退後の面々も有之候はば乗船引退可申候尤船御詰後此度被仰付置候

- ・右之趣被仰出候間支配有之面々は其支配方へも可被相達候
 - ・さらに宝暦元年（西一七五一）七月二十四日に下記の達示をしている。
 - ・一、洪水の節御家中末々迄居宅退罷越候はば宿到候様兼而左の寺地へ申遣置候様町奉行へ以手紙申遣す
 - ・北小路、浄菩提院、台雲寺、善正寺、祇園寺、新小路、光福寺、春日寺、光明寺』
- （引用文献：西村祝一 1966『郷土物語 火と水との戦い』延岡春秋社）

【享保6年7月大雨の概要】

- ・享保6年7月大雨は、7月26日～31日に渡り、多数の建物被害を及ぼし、宮崎県での死者は多数、長崎県でも死者は46名にのぼったとされている。

【流れ灌頂（かんじょう）：延岡市】

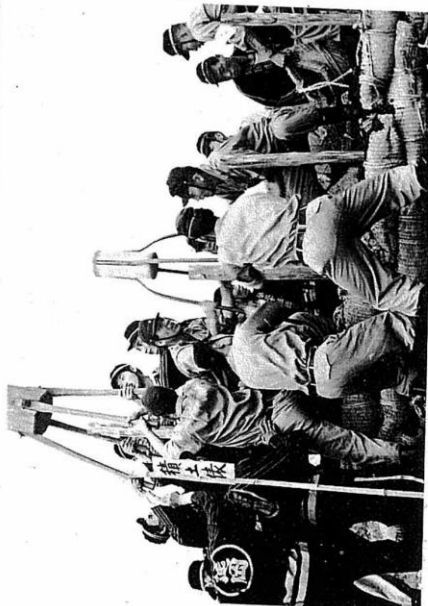
- ・流れ灌頂は、毎年8月18日に延岡市仏教会が主催となり、「水郷」と称される延岡市に江戸時代から伝わる夏の風物詩である。
- ・もともとは、水害や水難事故の犠牲者の霊を供養するために始まったとされている。川面を照らしながら流れていく灯籠の姿は幻想的で、訪れた人たちはゆっくり流れていく灯籠に手を合わせながら故人の冥福を祈り、先祖の霊を見送る。



▲「流れ灌頂」の川面を照らしながら流れていく灯籠
出典：延岡観光協会 HP



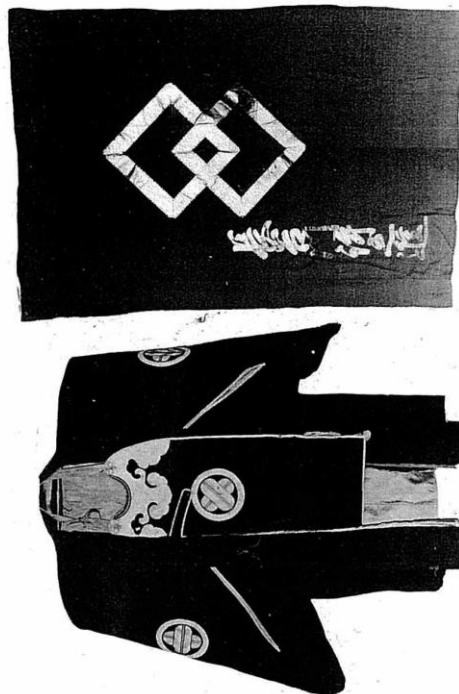
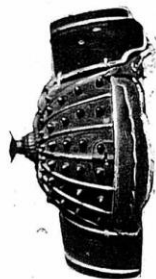
▲延岡市東本小路（延岡市役所河川敷駐車場）



上 昭和29年の大洪水

炊き出しを配るゴムボート (本小路)

下 水防工法訓練



上左は火事装束のかぶりもの
上右はかぶりもののたれ
中左はかぶりもの (東京消防庁蔵)
下左は火事装束の衣服 下右は幟
以上四点は桜小路長谷川時丸氏蔵

地震と津波と竜巻

延岡で一番古い地震の記録

鳴動とともに大地は裂け、火を噴き、山の如き津波が打寄せ、一瞬にして数十数万の人命を奪ひ、この世の最後を思わせる地震!!しかも予告もなければ待つたなしの地震は昔から恐ろしいものの第一に教えられる。

桜島の大爆発、関東大震災、三陸沖大津波、福井地震、新潟地震、松代地震と忘れたころにやってくる。それにしても、人生六七十年の僅かな経緯では他界の出来事としか考えられない。国民防災の日々と定められた九月一日も若い人にはピンとこないのも無理はない。

わが国で一番古い地震は、日本書紀にてくる允恭天皇五年(西四一六)の地震。九州では天武天皇六年(西六七九)の地震。一番大きいのは享永四年(西一七〇七)の地震。宮崎県では寛文二年(西一六六二)の外所地震といわ

れる。

知らぬが仏々と安閑としている私達の住む郷土に、こん



千光寺由緒にある地震津水の記録

な地震や津波があつたかと記録をみるに驚くのである。延岡で一番古い記録は、延岡市祝子町千光寺に被書記録がある仁和三(西八八七)七

月の地震で、これは宝永四年の地震津波に優るとも劣らぬ大きなものであった。理科年表によると、「七月三十日、東経百三十八・三度、北緯三十六度、京都及五畿七道、庁舎転倒し津波あり死傷多し。M（マグニチュード）八・六」とある。この地震で川島の熊野大権現も倒壊している。

日州日杵郡祝子村千光寺由緒

一当寺開闢人王西拾五代聖武天皇神龜元年甲子年行基菩薩巡国之御所御滞在ニ而聖觀音並ニ脇立不動尊毘沙門天三尊を彫刻被成其御所之領主松田肥前守清舎菅字御建立被成右之三尊奉安置護國山慈蓮寺と号ス田畑山林御寄附之田依之当寺開基奉光院殿松翁相伝大居士と法名古墳石塔寺内ニ御座候其後仁和三年七月大地震洪水ニ而寺地田畑大半川原ニ被成候然してより年々水災難後因茲同村之内夏田ト申所江引移候然所法王派ノ長孝士繼と申僧在任之節大士之靈夢により今日跡ニ遷来り候其以後当寺觀音江時役退散之御祈禱御座候処祈願円成被成此故觀則大殿広堂御造営運慶作之所陀舎迦を本尊と被成遷又広堂ニ者右之三尊奉安置候其節円通山千光改骨有之候蓋傳系士微以前法相宗三論之僧徒

歴住之ニ相見申候誠ニ往古者延岡川北隨一之隱匿与申伝候得共只今ハ一遺一坊三而境内九畝武歩御在實地と被成山林斗日魂之通代々之御領主御陰ニ而御座候且又慶長拾九年以來延岡合靈寺末寺と被成候（以下略）

延享四卯九月日 祝子村 千光寺印
寺社御奉行

清水五郎太工門殿

今泉郷 左衛門殿

右延享年中書上有之候写之外由緒等無御座候以上

享和二戌正月 祝子村 千光寺

砂町佐藤栄三郎（明治30年生）さんの話

『一、三十年前のこと、現在の千光寺の向い柚木側の川の中から、春日（神社）さんにあるような大楠の株の埋木を苦心しながら機織で巻き揚げたことがある。』といっているが、地震洪水の被害をうけた大昔の千光寺はその付近にあったのではないかとわれている。

別府湾内瓜生島の海没と

「地震加藤」地震

ク災害は忘れたころにやってくるといわれるが、ここに掲げる別府湾内瓜生島の海没地震と「地震加藤」地震は、その間わずか七時間で、わが国にこんな大地震が引続きに見舞って来たのである。

国民百科事典によると「文禄五年（西一五九六）閏七月十二日、豊後薩摩津波あり、別府湾内瓜生島が海中に没す死者七〇八」とある。別府湾大分市海岸から五・六百米のところに周囲三里（十二キロ）というから、丁度、延岡市島野浦島ぐらゐの瓜生島（略図参照）があつて陥没し、さらに、その一年後の七月二十九日には瓜生島の西にあつた久光島も海没した。

武者金吉編日本及隣接地域大地震年表によると「豊後、七月三日即ち一ヶ月以上前より多く地震を発し、特に閏七月十一日未刻（14時）より十二日申刻（18時）に至るまで

大小無數の地

震が起つたが、

夕刻に至り大

地震起り、高

崎山其他崩れ

八幡村炸原八

幡社拜殿其他

倒潰す。つい

で海上に一大

幸響起り、海

水遠く引去りし後、大津波寄来り、別府湾沿岸は莫大なる

損害を蒙つた。大分及び付近の島里は悉く流没し、独り同

慈寺の衆師堂のみ巍然として残存したと云ふ。佐賀國では

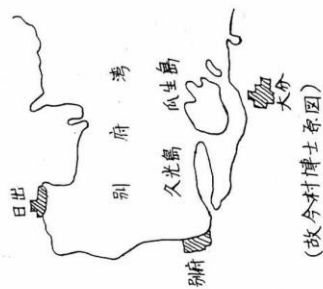
崖岸崩れ、家屋倒潰し、田畑塩田の流没六十余町歩に及ん

だ。別府湾の全沿岸が被害を被つたことと察せられるが、

其他の被害は明かでない。なほ津浪は日杵其他にも損害を

与えたようである。この地震に關し特筆する事件は瓜生島

の陥没である。瓜生島は別府湾内大分市海岸より五六町の



距離にあり、東西約一里、南北約二十町、周囲三里余の島であつたが、この時島の八〇％は陥没し、七百八人の死者を生じた。』とある。

一方、「地震加藤」の地震は瓜生島陥没地震より七時間後の閏七月十三日子の刻におこつた。秀吉の居城である伏見城の天守閣や諸所の門などが倒壊、城中にて土崩七三、中居下女五〇〇死、界にて死六〇〇、離震中の加藤清正は主君の安全を気遣ひ、部下三百人に飲宴など持たせて急遽一番乗りの登城、警固に當り、遅れて登城する部将たちを見返す一事は歌舞伎や歌劇、講談などで余りにも有名である。

瓜生島、久光島の海没津波は延岡地方に影響があつたか不明であるが、薩摩の文字も見えるので記したものである

外所地震、津波

理科年表によると、「寛文二年（西一六六二）九月二十日。日向、大隅。潰家三八〇〇、死傷多し津波あり。日向

南岸沖」とある。

この地震は、宮崎県（日向国）地方では有史以来最大の地震といわれるもので、日本史年表には「西日本大地震」とある。被害地の最も甚大なのは宮崎市大淀川河口北部から、ビロ―樹繁茂する観光地青島の近くまで周囲七里三十五町（約三〇キロ）が陥没し、大淀川河口にあつた福島村など七ヶ村が全滅。現在宮崎下水流に鎮座の小戸神社は当時大淀川河口に當る下別府村に鎮座され社地社殿共に海没、加江田村の加江田神社も海没、下別府番所等も同様海没した。この地震資料は日蘭永年の「延慶世鑑」や妙専寺の「年代記」をはじめ沢山あり。安井重、田辺剛先生は續震時報別冊「日向灘の外所地震津波調査について」にこれを纏めている。

（延慶世鑑）寛文二年九月、日向國中大地震あり。中にも宮崎、那珂二郡最も甚しく、山崩れ、谷崩れ、民屋の破損は数知らず、海辺の田畑海となること凡そ七、八十石に余れり、常に潮の満に岩の頭を出したる所、地震後は岩頭三四尺海底にあり。是を以て見れば地の陥ること三四尺余な

るべし。前代未聞の大地震也。

（妙専寺年代記）寛文二壬寅九月日向一國大地震。別シテ宮崎山崩、民家破損數不知、海辺田畑海トナル凡七、八十石、地三、四尺ハト陥ル

（佐土原地震集記）伊東領内本郷の一在所、田地九十石程り沈め海となる。其村々の人家屋敷、屋敷の崩ひ、竹木までゆり沈め、木も竹も柱も海中より立てり。以下略

（日向纂記）寛文二年九月十九日子の刻日向國地大に震し、且つ津波俄に來りて那珂郡の内下加江田本郷所々の地陥つて海となること周囲七里三十五町、田畑八千五百余、米粟二千三百五十石余流失あり、潰家千二百十三戸の内陥つて海に入るもの二百四十六戸、其人員二千三百九十八口の溺死十五人、牛馬五頭に及べり。飯肥の城にも石垣九ヶ所百九十二間破損し、城臨ニヶ所埋り外諸士屋敷、土藏石垣等の破損崩つて數ふるに遑ならず誠に古今未曾有の大災あり。

（大日本地震史料三卷中日記）島津但馬守領内、日向國佐土原、九月十九日夜子刻、數敷地震破損之由注進之、土

藏一、度屋三十軒、二之曲輪冠木上より崩落、地三尺われ申、田畑少破亡地有之、山崩、當時人馬通い無之所御座候、侍寺町屋在々百姓等家都合八百軒崩、人牛馬死過仕る者數多有之、同二十日も四十度地震、破損は無之由注進之、

有馬左衛門佐領知日向與城中甚地震、石垣崩、並町屋等數破損、奏曲重而注進可申由是又去月十九日子刻也。以下略

（大日本地震史料三卷玉露叢）九月に大隅國大地震、海陸地と成る。

九月十九日子の刻、有馬左衛門佐領内に於て地震に付、破損色々之覺、居城三の曲輪の橋脇之石垣、高さ水底より四間半破損の所五間崩れ申し候、田畑五十七町余、在々所々潮入崩れ掩り地、宮崎下別府の邊にて破損船十艘、此荷物米七千二百五十俵之内、大小麥三百三十俵余、米は五千五百俵余ぬれ申候、破損の堤十三ヶ所、間敷六百七十間余なり。井手灘三ヶ所、間敷百四十間余破損。道薩國て當時通路難成所々御座候事、類家千三百軒余、並倒れかかり家五

百十軒、死者五人（筆者注：純皇代略記では五の下に百を脱記したようだとっている。）右之外御預り所本座破損之寛、田畑所々山岸破損之地御座候事、御米二百六十俵余並舟に積之宮崎下別府において高潮満て地震に沈之濡申米也、類家九十軒余、倒れかかりたる家百二十軒余御座候以上の外、純皇代略記、青島神社々伝等々資料多し。肥前平戸の人、儒三善のク一宮巡詣記によると、延宝三年（西一六七五）日向廻國のおり三田井重千蔵から延岡、土々呂を通り郡農の日向一宮に参詣したが、九月十七日の記に「……熊野原を行き過ぎ、たさしと云ふ所を通りけるに入り海広く見えけり。近きころ迄、どんと、どんと云う村ありけれども、大地震津波来りて今は入江に成りたると聞き、『初堤にどんと、ころびて家もなし』、左のかた海ごしに吾田山后原とて木花開耶姫の生給ひし所見ゆ……」と洒落れている。

× ×
宮崎市青島街道の木花町島山に外所地震の碑が六基ある板塀の囲いの中、十平米ばかりの土地があり、五十年毎に



宮崎市島山にある外所地震の碑

建てたといわれる供養碑、右から二基は礎石が折れたり欠けたりして破損が甚だしいが一番左の一基は宮崎市長が三

百年忌を覚えて建てたもので、高さ一、三五五米（石〇、六七米、巾〇、二四七米）、正面には「三外所地震供養碑」と刻んであり、右側には「昭和三十三年九月十九日建之、宮崎市長有馬義利」とあり、左側には「寛文二年九月十九日ノ地震テ外所科海中ニ陥没シ人畜多敷難災シタ以来五十年毎ニ碑ヲ建テテ供養シテ来タガ本年三百年忌ニ相当スルノデ将来ノ無災安泰ヲ祈セテ祈念シナオコレヲ後世ニ伝エルタメコニ供養神ヲ建立スル」とある。

外所は海中に没してしまった地名であるが、同地方に外所姓を名乗る家が数軒あると聞く。

※々震源地は日向灘々とよく耳にする。日向灘には環太平洋地震帯の一部に当たる地震の帯がある。北緯三十二度、東経百三十二度、つまり、日豊本線佐土原駅から真東に延ばした線と九州最東端から南に下った線の交る付近がそれで、日本有数の地震地帯といわれます。三十二度と百三十二度、双方共三十二度だから覚えやすい。この地点を覚えておくと、台風襲来の時も台風の位置がわかって役に立ちます。

宝永四年の地震と津波

宝永四年（西一七〇七）といえば富士山六合目付近に宝永山を噴出した爆発地震かと思つて調べると全く別のものであることがわかった。

理科年表には、「宝永四年十月四日東海通畿内南海道及び東山四海道の一部。潰家死傷夥し、潰家二九〇〇〇、死者四九〇〇。九州の南東岸より伊豆まで津浪を受く。土佐にて其の高き二〇米余。土佐西南郡処々陥没、東南部隆起（東海道及南海道中）M八、四」とある。関東大震災がM七、九であるから本邦地震最大級のもの。

（宮崎県災異誌）未刻地震その後止まず丑刻大震、近畿南海道、東海道、山崩れ、谷埋まり地裂く。沿岸津浪起る。紀伊土佐人多く死す。大敗殊に甚し。ために死する者三万余人。前代未聞也（皇代略記）

（日本震災凶難録）日向国（竹村太郎右衛門代官所）天領代官堤防破損一二〇〇間。潰家四一〇軒。流失一〇軒。

破損三三五軒。死者一人。損牛一頭。損馬一頭。その他田畑侵入あり其未だ調査及ばず。總計田畑侵入あり共五七〇〇石余。田畑荒地二四〇町一反。堤防破損六九五八間余。石垣流失三五〇間。同破損三四九間。潰家一三四一八軒。流失一五二五軒。破損一六二四九軒。死亡一三九人(以上梅澤成郷氏による)

× ×

日本近海に起る津波は、全世界に起る津波總数の五分の一強に當るといわれクツナミクという日本語は今やシェード(柔道)と同様に世界の通用語とならうとしているといふ。

なお、前記「宝永山爆発」地震は日本のシンボル富士山の爆発で、甲府市消防本部の御好意により調べてもらった文献があるので紹介する。「富士の研究」全七巻のうち第五巻「富士の地理と地質」石原初太郎著、昭和三年九月八日発行の中から

延暦十九年六月(紀元八〇〇年)に起きた富士山の中央噴火口と側火口と共に噴出した噴火は宝永の噴火と比して

三三三

一層激烈なもので有史最大のものと思われる。貞観、宝永の二噴火は一方面の側噴出で余程小規模である。

宝永の爆発火口

宝永の爆発に於ては山体の一部が吹き飛ばされて其の跡には大なる孔を残している。此の孔を新内院と称へ中道廻りの通路は其の孔の底を横切る。其の東側に標高二七〇二、三米の突峰がある。之を宝永山と云う。宝永爆発の際の噴出物である砂礫及び熔岩の岩片等の堆積したものである

宝永爆発の際、江戸は五代將軍綱吉の晩年に当り文化の大いに発達した折なれば其の記録は比較的豊富である。故重野安綱博士は富士山噴火記(宇士院雜誌第七編一二)と題し宝永の爆発に関する幾多の信憑すべき文書や記録を集載された。中でも吉田村の御膳田辺安豊なるものの長歌体の記文を称讃されている。富士山附近に於て目撃せる際の記事で当時の状況を知るには最もよき手掛りと思ふので十二支刻限を今日の時計時刻に直して其の大要を述べよう。

宝永爆発の状況

十一月二十三日の爆発に先き立ちて十月四日に吉田に地

震があり、爆発前日の二十二日には夕刻から地震五十余回。当日の明方からは数えることの出来ない程であった。午前十時頃に南方(吉田より爆発火口は南に當る)にあたりて天から丸き鐘型の光、降ると共に黒煙山の如く鳴動しつつ響く音や雷鳴がしきりにあつた。午後八時頃火煙燃え火の玉天へ上る(俗岩の断片飛散しいわゆる火山弾となつたものか?)。二十四日の午前十時頃には霞の如く薄けむりが四方にかかり須走村は石砂降りて天火で焼失した。午後八時には地震鳴動と共に光が一層増加した。二十五日には朝日がさしたが屋頂から又曇る。二十六日には西風出で黒煙も鳴動も漸く鎮つた。二十七日には煙は高かつたが鳴も光も和いだ。昨日の午後八時には震動噴煙共に劇しく火の玉(火山弾か?)上る。十二月朔日か二三日までは衰りなく四日午前十時には地震起りて夜半まで続き火の玉も劇しく五日には南風起り煙過きには鳴動もあつたが午後十時頃から爆発鳴も静まり六日、七日兩日は平穩、八日地震數回夜半大震動火玉なお多く、九日の午前四時より穏かとなつた駿東郡の足柄から富士山まで村里も草木も埋りて見えず小

川の水も絶つた。

々続談海々によれば、二十六日江戸に達したる報告を記して

十一月廿一日油井、神原、吉原大地震井度程(三十回程の意味)家一軒も残らず揺り潰され油井、神原辺には人影もなし。

と云い々月風堂聞集々には当時の様子を左の如く記している。

十一月廿四日夜半江戸中地震且つ降砂、廿五日夕又地震箱根、小田原大雷鳴焼石降る相州から江戸まで凄しき赤雲現はれ藤沢から上の方には一分餅の程なる焼石降る云々

当時江戸の状況如何と云うに新井白石の折焼案々の記に

十一月廿三日地震雷鳴(空氣の振動に基づく所謂鳴動ならんか?)降灰あり南西の方黒雲起りて電光頻りなり西城に参りしに白灰地を埋めて草木みな白く御前に参るに天甚だ暗かりければ燭を挙げて講し侍べる時の刻(午後八時)に灰降ることやみしか地震は絶えず。廿五日も天暗く雷の

震する如く夜に入り灰又降る此の日初めて富士山焼けのこ
とを知る程より後降灰止まず云々

当時噴火の報告が漸く三日目にして幕府に達したのであ
る。又^お草々^{くさくさ}に江戸市中の状態を述べて

宝永四年十一月廿三日午刻時分いつもなく震動し雷鳴
頻にて西より南へ墨を塗りたる如く黒雲たなびきて暗夜の
如く昼八ッ時(午後二時)より風色の灰降る噴灰に至り段
々烈しく後には黒き砂大夕立の如く降り来りて終夜震動し
廿四日午後二時過ぎより空晴きこと夜の如く物の色も見え
かね往来絶へ適々往来の人此の砂に触れて目くるめき怪我
などせしものありとかや云々(総読海以下其の大意を摘記
す)

震災予防調査会報告(第六十七号八十六号)によれば富
士山頂と江戸本郷との直距離は一〇一軒であるから空気が
音響を伝えて江戸へ達するには約五分を要すべきである。
また大破裂の初發後三時間をへて灰を降らしたとすれば当
日無風なりしに俟らず大気の上層に於ける風速は一時間三
十秒内外なりしなるべく而して江戸にては夕刻に及び初め

て砂を降らしたるを見れば噴出の最も激烈を極めたのは初
発より四、五時間後であらう(同報告書には当時江戸に於
ける状態をすこぶる詳細に学術的に述べてある)これを要
するに宝永四年の爆發は十一月廿二日夕刻の地震の噴発に
始まり(是より先十月四日にあつた地震は其の誘因か?)
二十三日の大爆發となり噴灰幾分の消長はあつたが全然鎮
静に帰したのは十二月九日の朝で十八日間に亘つたのであ
る。この間地震のため家屋は倒壊し(南側の海辺地盤脆弱
の地方最も激烈を極む)砂塵は東方の村菱田畑を埋め江戸
までも及んだ。此の砂塵は黒色を呈し今日前浜歩道には數
米の厚き層をさえ認め南は印野辺に至る。上方爆發火口に
近づくに隨つて大小の熔岩塊を混ぜり此の熔岩塊は何れも抛
出されたるもので饅頭形、荖荷状或は稀に球形又は桃実形
を呈するものあり。其の空中に投げ出さるるや灼熱する熔
融体たりしを以て遠方よりは火の玉の如くに見えたので
ある。〆塩尻〆に

十二月の初相州佐川(酒匂川のことか)へ人の言又は手
足など多く流れ来るも ふじの山下の村、「石に打たれ形

くたかれて かかる者も流れ出でけるにや」と旅人もうた
つておどろく云々

等の記事あるを見れば人畜の死傷も(王として東の麓に)
相応にあつたことと思われる。

延暦貞観宝永三大破裂の比較

宝永の爆發は最新のことであり幕府の所在地たる江戸
に近かつた為幾多の文獻も残り比較的明細に知られている
が富士山東南側の一極部に限られたもので其の噴出物は主
として砂塵であつた。然るに貞観の破裂は反対の西北側に
於ける側噴出で大規模な熔岩を流出した其の状態は恐くは
大正三年桜島の破裂におけるようであつたと考えられる。
然るに延暦の破裂は富士山、中央噴火口はもとより周囲に
側噴出をなし熔岩を吐出し砂塵を飛ばし富士の全体に亘つ
た大活動で最も激烈を極めたものであつた。』

明和五年六年の地震

〔妙尊寺年代記〕明和五年戊子六月大地震、土井車海母ノ

而觀古川ニテ埋死、大火ニテ当寺吊鐘ワレ候ニヨリ、トリ
オロス。世モイタミニ付トリタタム』とあり、これに対す
る他の文獻記録は見当たらないが、埋死二人、大火が発生し
て妙尊寺の吊鐘が破れ、堂がいたんで片付けたといふことこ
ろからみれば相当大きなものと思われるのである。

※参考、理科年代には明和五年六月九日荒球で大地震があ
り、高さ数尺の津浪あり。慶良間島に家屋損害九棟あり。
王城石塙破損(那覇付近の海底)。というのがある。

× ×

日向國史によると、「明和六年」七月二十八日地大に震
ひ、延岡本城の石垣を崩壊す。全十二月十六日当秋、地震
大風雨等の災厄あり。且つ前年より家士の饑乏甚しきを以
て、是日、實領に代ふるに大豆を以てす。」とあり、七月
二十八日高鍋城も破損しておる。地震時報には、この地震
を八月二十九日と扱い(新應)、理科年表によれば「日向
豊後。諸城破損す。(宮崎東方沖)Ⅳ七、四」。日向雜記に
よれば「日向、豊後前國の地強く震ひ、屋舎崩壊す。この
時近國もまた震ひ、薩摩國沿海の地は津波の害を被れり」

とある。

安政元年の大地震津波

安政元年（嘉永七年＝西一八五四）の地震津波の特徴は関東大震災以上の超大型級のもので被害も大きく、しかも松代頻発地震の如く長期間続いたと思われることであり、年代も近かく百二十年前のことで、いろいろと資料や話が残されている。

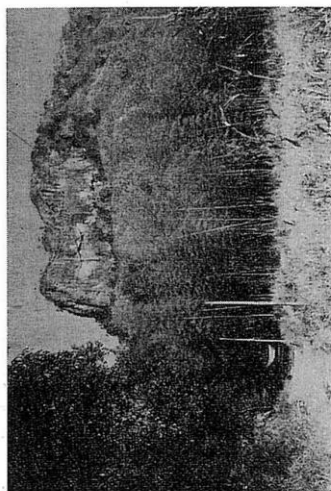
〔理科年表〕十一月五日、東方伊勢海より四方九州東北部に及び土佐阿波紀伊達し。M八、四。大津波は房総半島より九州東岸に及ぶ震災地を通じ住家全潰一万余。焼失六千。土佐紀伊大阪にて津浪のため流失一万五千。其他半潰四万。死者三千。震火水の為の損失家屋六万（南海道神）全十一月七日、豊後豊前伊予。M七、〇。大州吉田大分等に潰家あり（大分三崎半島線）

〔島野浦沿革記〕嘉永七年甲寅十一月五日七ツ時ヨリ大地震ニテ津浪差巻夜二入り二度、六日ニ至リ止ム。同日寅刻

三三六

ヨリ雨降、七日辰刻雨止ム。已刻大地震、村方一流山ニ登リ小家掛シ之ニ住ム。十日十一日連々里ニ帰ル。若連中ハ屋敷見廻リス此ノ人数凡八拾名。費用金吾八拾百位ト云フ〔北川村郷土史料集〕沢武人編。北川村長井本村申斐又兵衛氏自筆の災害記録の大意を記すと十一月五日夕刻より六日七日八日十日十一日十二日十三日と夜びる大巾地震が頻発。夜間、『津波を恐れた村人たちは佐寄子供牛馬を引つれて、提灯、たいまつをかきし氏神御山に避難す。その人数三百人余。三七日間たち籠る。また延岡町民、家中（士族）の者は今山愛宕山へ、大武町の者は無慮山に集る。一万津波は毛無が浜（長浜）を打越し、潮高一丈（三米）北川を廻ること約一〇キロ、葦野の近くにある的野の瀬をだるませた。大分県佐伯では大海より潮高二丈余（六米余）、佐伯城の下近辺で一丈一尺。翌安政二年正月二十日大朝大雷、大地も動く烈しい夕立が来てあがり、寅十一月五日より卯正月廿日迄日数合せ七十六日の間、数十数百を数えた地震が続き、三月十五日夕刻より大巾地震、明日寅の下刻まで五度。世はゆりなおすとなえ、その春は麦の大

農作で村人たちは喜んだ。』



安政地震に落下した行徳山の岩壁

行徳神社
甲斐秀雄宮司の話では九州第一の名瀑がある。『龍岳の』大岩壁は安政の大地震のとき落着いたと父から聞かされています』と、への字形に落着いた跡を残す岩

肌を指さしていわれる。

光勝寺権藤正行老師の話では『吉村理三郎の祖父が、安政の地震はひどい何のちめてん家の軒が地面につかえまりました。』と

早日渡陽市さんの話では、『私の祖父の話では、安政の地震の時、五ヶ瀬川の水が坂田橋の下を西に向ってさかさに流れていた。』と

千手カヨさんの話では『私の生家は中町ですが、祖母の話によると、うちの軒と前の家の軒がこつつき合いよつた。』と

須美江町（須美江村）甲斐勝三郎老人（明治九年九月生）

の話
『御の甲斐國飯（前延岡市消防団第五十八部々屋）は私の母屋じやが、あれの家の戸には津波が来たときの水の高さがしるしてあつた。村の者は増記憶している。』と手で一米五六十の高さを示しながら『國飯の先祖の家は海岸近くにあつた。津波で村は大ぶん被害があつたと思うが、國飯の先祖は幾の役にしがみついて危く一命を助かつた。家は

三三七

崩れはしなかったものの津波で移動して住まれぬようになつたので、家をはといて須賀江の一番奥まで引込んでしまった。』と津波の恐怖から家を移転させたことを話してくれた。

× ×
島野浦島の太平洋に面する東の絶壁に鼻熊というところがある。ここに行く道の馬の背のような所をク波越々と呼んでいる。高さ三十米ばかりあり、その付近に怪石や貝殻がみつかるが、津波のとき波が打越したので、その名があるという。

× ×
延岡藩江戸屋敷の古文書、嘉永七申寅万巻帳には
十一月七日
一此節度々地震ニ付火之元燄重ニ手当致し置立退候様今宛
從
公儀御触有之候御家中江左ノ通大目付より為相頼可然
と差相談渡
御徳にも今日大目付江御書付相渡之

二三六

大目付江

覺

此節度々地震有之候付而は此後之儀被難計銘々立退方之儀
心得茂可有之候得共兼々火之元之儀燄重ニ手当致し置立速
立退候様向々江可被置候事

十一月

右之通從

公儀御触有之候御家中一統部屋々々迄火之元入令立退候
様可被置候

十一月

吉通

六本木 重役

桜島の爆発と阿蘇山の爆発

火山の噴火爆発による地震で本県に影響が多いのは何と
いっても霧島で、国民百科によると西暦七四二年から約六
十回の噴火の記録がある。日向国史や宮崎県大鑑にも記さ
れているが延岡に直接の影響が見られないから書くのをと

どめた。ここ五六十年來待筆すべきものは、大正三年桜島
の大噴火と昭和八年阿蘇山の爆発である。

大正三年一月十二日午前十時五分、数日前から震動を続
けていた桜島南岳が黒煙と鳴動を伴つて火をふき、二月上
旬までに約三十億トンの溶岩を流し、約三十人が死んだ。
この溶岩で桜島と大隅半島は陸続きになった(朝日新聞)
噴煙三万尺(九千米)の高さに及び上空に昇つたヨナが宮
崎県北部地方にも流れて、延岡は勿論、北川方面も各家屋
の屋根や田畠は雪景色ならぬ灰をかぶつて、一面灰色にな
り人々を驚かせ、黄塵ならぬ灰塵は数日間天を覆つて視界
を遮り、眼が痛んだという。また、海面には無数の礁石が
浮き、浜にも打ち上げられたと聞く。

※ 北川村長井本村、甲斐会兵衛氏資料には嘉永四年二月六日夜
降灰の記事あり。原因不明

× ×
阿蘇山の爆発の中、昭和八年二月二十四日から一週間
続いた爆発は特に激しく、その轟音が延岡地方にも聞かれ
た。

ドロン、ドロンと地ひびきたてて聞ゆる爆発音は、日向
灘でその頃よく聞かれた帝國海軍の演習に軍艦から打ち出
す大砲の響かと思われたが、あまり長時間続くので何時も
と異つて不審に思つてみると、阿蘇の爆発とわかつたので
ある。

昭和六年日向灘地震

十一月二日夜、宮崎県下に大きな地震があつた。延岡地
方では明治以来の大きなものといわれる。

初震は午後七時すぎで、引続いて何回となく震動、消防
組は、『津波來襲の心配があるから避難して下さい。』と
連呼して回つた。これを聞いた住民の一部は城山、今山、
鑿谷山へと避難し、リヤカーなどで身回品や食料品、蒲団
などまで運ぶ者もあり大騒ぎ、三つの山は避難場であつた。
山に避難しない者たちも、それぞれ近所に集ま
つたりして不安な一夜を明かしたのである。

延岡新聞の屋田記者は地震の夜、取材に回つて光勝寺に

二三九

立寄り雑談していたが、揺れるたびに飛び出そうと腰をあけて膝で立つ。あまり何回も繰り返すのでおかしかったと横藤さんはいつている。延岡新聞十一月三日の夕刊には取材の地震記事が一ぱいであった。

浜町、山本七郎さんの話

「うちの隣りに七十才ぐらいの婆さんが一人住んでいた。あの晩 ひっきりなしになえ（地震のこと）があったので津波を心配した婆さん、『大丈夫じゃろかい？』逃げる時はつれにござい。』と三べんも四べんもやつて来る。夜は寝ませんうである。これを聞く方もたまらんが、落ち着かせにやこまると思つて『鶏が鳴いたら津波は来んけな。鶏が鳴くのを気をつけてござい。鳴いたら大丈夫じゃ。そんなに言われちよる。』といい聞かせた。婆さんは、『そんなにこつがあるとしやろかい。』と帰つたが、間もなく鶏が鳴きはじめ、婆さんは来なくなつた。津波がくるとき鶏がとんでゆき波の花を蹴つた。という話があるので思い出して話した』と。

宮崎県災異誌によると、『二日午後七時三分強震（震度

五）起り、宮崎市内外の電灯は同時に消灯し……』

チリ地震津波

地球の裏側、南半球である南米チリに大地震があり、日本まで津波が押し寄せたのである。

昭和三十五年五月二十四日の日記には、『三陸方面に大津波が発生し、相当大きな被害が出た模様。午前六時のラジオニュースを聞いて驚いた。被害は時間とともに益々大きくなる。』七時には高知県まで津波警報が出た。午前八時、宮崎県にも発令さる。午前十時延岡市役所経田で県から警報発令の通報が消防本部に達し、ただちに島浦、熊野江から赤水、鯛名まで電話或は宣伝車を廻して警戒するよう伝達する。午後六時子供ニュースの時間には、死者八十五。行方不明七十二。浸水家屋四万二千戸。津波の高さ五米とついていた。まだまだ時間がたつにつれ被害は多くなるようだ。

原因は南米チリ。関東大地震より大きく、百年この方な

い津波とか。警報も経験がないために発令が遅れたと云っている。』

島浦町、長野和好さんは、この朝延岡通いの日豊丸に乗船し、方財の州の鼻（延岡港）を入りかかった時、ゴォ、ゴォ、ゴォーと船底が海底につかえ、いつもと異つた異様な音と共に船が傾いたので、甲板に出て見たが、潮が引いて川の流れがひどく、あわや転覆というところを、すぐ後波を待て立止直り事なきを得た。後で、これがチリ地震津波とわかつた。』といっている。

日豊汽船事務の黒木清氏はこれについて、『延岡港口の一番浅い所が干潮時、水深二・三米であり、日豊丸の船底が水深二・三米ですから、干潮時には時々船底がつかえることがあります。チリ地震津波の時は一キロぐらい間をおいて、高さ二〇センチ位の波が十貫（地名）船着場までやって来ましたが。不断の風波とは異つた波で、気味悪く濁っていました。』

國民百科には、一九六〇年五月二十二日。チリ。死者九〇九。ゆくま八三四。チリ津波による日本での被害（

死者一九。全半被災約五千）

チリ地震津波による宮崎県下各検潮所に誌された潮高

油津 二・二五メートル

宮崎 〇・六二

細島 一・八八

延岡（東港）〇・八八

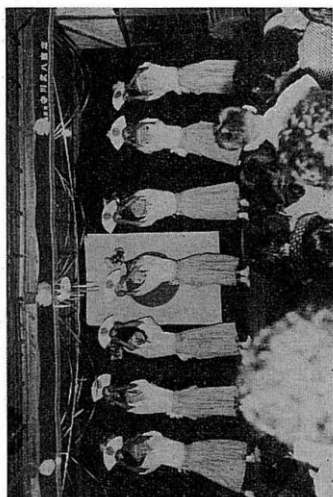
福島 一・五〇

津波によるひきざ（午前十時五〇分）一・〇一メートル

伊福形「花笠踊」の由来

延岡市伊形町（旧伊形村伊福形）に古くから伝わる花笠踊がある。毎年旧暦お盆の十六、十七日になると、ばんば踊がはじまる前に公民館の中でこの踊がある。

三百六十年の昔、同地区を大津波が襲ったが、その際、七羽の白鷺が石田部落に舞い降りて、たわむれたことにより津波が引いたという古事によって今日まで伝承されているもの。



伊福形の花笠踊り

踊子は、今年二十才の成人式を迎えた男子七人が選ばれた。両親ある者に限られ、新盆の家や片親のものは加わらない。白衣に白袴の白装束で、頭には白鷺を形どつたとみられる花笠をかぶって踊る。踊は三番あり、一番は鈴、二番は御幣、

三番は日の丸の囀、太鼓のはやしで踊るが、土々呂町霧島神社の岩切好雄宮司の話によると、『私は毎年お祭に行っていたが、花笠踊は萬神祭の神樂である。部落の休日を利用するために、お盆にしたものと思われる。』と

公民館から拡声機で、その由来を放送するので、原文の写をもらった。

『花笠踊の由来を申し上げます、今から約三百九十年前、天正年間だと言われている。伊福形部落は大瀬にみまわれ、山麓も通れなかつたそうです。そのため農作物はもちろ人、人畜までも奪われました。村人達は伊福形の石田部落の山王神社(さんおんじんじや)に祈願して、もし大潮がなくなればおれとして踊を奉納するからと誓いまして歌を作り、踊を作りまして、旧暦七月十六、十七日に舞うわけです。

なお、神話別伝を申し上げます、

伊福形部落が大津波にみまわれ、七日七夜朝、村人達は苦しんだそうです。村人達は皆んな揃って、ある山に避難して、神様や仏様にお祈りしますと、不思議なことに何処か

ら七羽の白鷺(鶴)かめともいう)が舞い降りて来て海で遊びますと、これは何とあの恐ろしい津波は平穏にかえりました。村人達は、これは神仏の救いと歡喜して、それ以来現在まで七名の若人が花笠をかぶり、着こなして、この花笠踊を奉納し続けて来たのだと伝えられております。』(完)

伊福形花笠踊の歌詞

一番(囀で踊る、昔は鈴)

- ① (はいや) 鶴めせ鶴めせ (は) 鳥籠の (うーはいはい)
- (は) やまがらが籠のうちでも (は) 暇さこ (うーはいはい)
- (はいや) 鶴がえー小籠でのー (そと) 遊はれず (うーはいはい)
- (はいや) 鶴がえー小籠でのー (そと) 遊はれず (うーはいはい)
- ② (はいや) 鶴めせ鶴めせ (は) 鳥籠の (うーはいはい)
- (は) 政頭が森にこがれて (は) 野にいてる (うーはいはい)
- (はいや) 鶴がえー連いかの (そと) 懸いもあず (うーはいはい)

- (はいや) 鶴がえー連いかの (そと) 懸いもあず (うーはいはい)
- ③ (はいや) 鶴めせ鶴めせ (は) 鳥籠の (うーはいはい)
- (は) 武蔵野の刃の敷ほこ (は) かよえん (うーはいはい)
- (はいや) 鶴がえー連いかの (そと) 懸いもあず (うーはいはい)
- (はいや) 鶴がえー連いかの (そと) 懸いもあず (うーはいはい)

二番(御幣で踊る)

- ① 天の戸を開いて月も (は) 夜もすがら (うーはいはい)
- すずしき舞は (はいや) 神のきのうら (うーはいはい)
- すずしき舞は (はいや) 神のきのうら (うーはいはい)
- ② 千早敷そだむけの神楽 (は) こいすまで (うーはいはい)
- 神の心も (はいや) しちみまします (うーはいはい)
- 神の心も (はいや) しちみまします (うーはいはい)
- ③ 野が代に久しかるべの (は) ためしにわ (うーはいはい)
- かねてぞまじし (はいや) 住吉の松 (うーはいはい)
- かねてぞまじし (はいや) 住吉の松 (うーはいはい)

三番（扇子で扇る）

浜の真砂に扇うつ波は

れーんり、れーんり、ちい、ちーんと

引いたるところは、のーれしや（ひし）

×

×

伊形を襲った津波の起源について調査してみると、養老年間とい、天正とい、慶長とい、全くまちまちでこれという定手は見当らず。公民館の放送も根拠がない津波の来襲というなら慶長九年の津波ではないかと思われるのである。

竜 巻

海水でも船でも家でも人でも牛馬や列車まで手あたり次第に巻きあげ、天から血の雨、泥の雨、魚の雨ふらせたりする暴れん坊の竜巻。その被害範囲は国民百科によると「幅二三十メートル、長さ四五百メートルがふつう」と記してある。

二四四

加藤茂教著「気象と災害」には『一九三五年アメリカシヨリア州に起ったトルネード（竜巻の呼び名）は、州の端から端まで延々五百キロメートルを時速十五キロメートルで進んだ。損害の最も大きかったゲインズビル市では、この通過に伴ない、れんが道の市役所や裁判所は木っばみじんとなり、牛や鶏が文字とおり宙に舞い上がったということである。宙に舞わないものは飛散する木片などで、全滅し農家の麦わらが猛烈な勢いで吹き飛ばされてきて、近くの電柱に針のように突きささっていたということである。ちよつと信じられないくらいであるが、これは事実である。このトルネードによる損害は、死者百三十一名、全壊家屋は十二百戸で、市の全家屋の五分之一を越えていた。』とある。

この暴れん坊、竜巻の古い記録が見当たらないのは被害が局部的に限られているからかも知れない。

一、嘉永三年の竜巻

門馬延慶の資料によると『嘉永三年八月七日延岡郡なる

大風にて領内伏家或は難破船多く死傷あり……』延岡藩役所も倒壊した如く見ゆるが、これは竜巻ではないかと推定される。北川村長井本村申親又兵衛自筆の災害記録によると（沢武人編北川村郷土史料集より）

『嘉永三年戊（西一八五〇）八月七日大風

一、其日の九ツ時より風つよく、屋根を吹きおこし、いたみある事はかずかきりなく、川筋の舟をよきあげ、すなはち竜巻の如くあいまえ、木、かや、草木迄もかれ、木かれの如く、又長井村之内ふせや（伏家）八ツ九軒たおれ、作方は申におよばず、高きび、ふこのるいは、たねこれなく東海川口辺はたびの舟いかりの綱を吹つきり、五人乗りの者みなあいて、船頭若人の死骸斗り上り、是又いづみややとひ舟之草

一、御家中様御いたみ之儀は、御役所之当りいたみ多く、又町方は屋根のかわらを吹きおこし候

一、長井家田無田米之儀不残いたみ、尤はやものの分は半作斗、おそものは種もなく、其年の御上納御蔵米之儀の直段買入は百目也。同要年正月よりは太妻産儀直段五拾七匁

斗、小妻産儀は八拾目、白米倉升三匁、太妻倉升匁九分とふいも（唐辛）産升は八分、はたか妻産升は貳貳式分、品々右之直段に而御座候江共二月がかりには買入候品もななく村中不残、こべ、わらび、かすねはりてみな命をつなぎ候事』とある。

二、明治十七年の竜巻

延岡内藤藩家扶松井二の日記の中に竜巻と推定せられるものがある。

『明治十七年（西一八八四）八月二十五日、雲崩り小雨降り、午後二時過風勢強きに趣き模様隠し、四時五時過ぎ頃南風の力烈しく未曾有の天災なり。橋を裂き、小屋を倒し所によりては坐中のたたみを飛ばし、舟を空中にとほし覺えず塞阻す。是より前四、五日を隔て二日程朝霧深く或は旭陽映し東天紅の如く全く天災の前兆なるを知れり。』とある。

二四五

台風と水害

明治三年の洪水（資料）

市内南町妙専寺年代記には

『明治三年庚午九月五日夜四ツ時ヨリ雷雨、六日又雷大雨
而橋流、九ツ水庭ヲ通り、七日大雨洪水床ニ四五寸上リ当
寺假門流失』とある。

長井村諸願控帳には

『作恐以書付御達泰申上候

一、居宅菅軒 横行三軒梁九尺伏家

一、人馬怪我無御座候

一、田作 三分之痛

一、畑作 芋四分之痛。唐芋五分之痛。粟七分の痛。蕎麦
大根、芋九分之痛。黍四分之痛。

一、新川、川除 害ヶ所

農野門

一、本谷筋痛

一、所々通筋痛

一、水高サ凡菅丈九尺

右管去ル五日より七日迄大風雨増水ニ而諸作井所々痛前
書之通書上如斯御座候以上

午九月 庄屋 田斐八左衛門

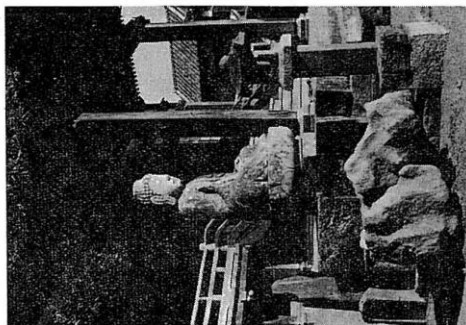
郡政掛民政御届御役所

とある。前者南町妙専寺は高い所ではないが一床二四五寸
とあれば相当な大水であり、而橋というのは大瀬橋、板
田橋のことと思われる。後者、北川村農野で凡菅丈九尺の
増水である。

明治十三年の洪水と 三福寺のねれ仏

昭和十八年の洪水は、大瀬、五ヶ瀬、姫子、北川の四川が氾濫し、屋間の洪水にもかかわらず死者、行方不明六十三名という大変な洪水で、年配の人ならみな承知であるが、

三福寺のねれ仏



而シテ二婦人ハ其ノ少下ニ死体ヲ発見セリ」と特筆されている。

この洪水で大瀬橋、板田橋をはじめ小橋もみな流失した。妙尊寺下陣の高さから考えると現川中地区全戸が浸水している。当時岡崎村に属していた新町の川原から下手一帯が洗われ、この辺は一変したといわれる。

市内北町、名利九品山三福寺の境内、山門を入ると本堂の左前方に御影石の露天仏、阿彌陀如来の坐像「ねれ仏」がある。(全高二・七六米。仏身一・三七米。蓮華座〇・二九米)これは、明治十四年、新町の川原から三福寺の境内に移されたもので、最初は境内右側にあった大きな松の木の下に移され、その後現在の位置に移したものである。

「ねれ仏」のあった所は、ねれ仏があつたため地名も「ねれ仏」といい、昔、処刑場であつた。(註Ⅱ現延岡商工会館南側で川の中に当る)何時の頃できた処刑場か、幾人処刑されたかわからないが、ここで処刑された死体は舟に積まれて川を渡り向い側の柳原(現須崎橋南詰付近)という所に葬られたとか。

るが、明治十三年の洪水もこれにおとらぬ大洪水であつた。延岡郷土史年代表には、明治十三年月不詳大洪水があつた。五箇瀬川二丈一尺(六・四米)。大瀬川二丈三尺(七・米)の増水。とあるが、月日と、その一端が妙尊寺、光勝寺に記録されている。

妙尊寺の年代記には

「八月四日夜ヨリ出水、本堂下陣浸水。

三須三輪岡寛大貫田如大損。

川原町柳下大クスレ

御堀口下水道ぞろ各橋皆流

死者四十人余

高千穂山陰所々山崩ル」とあり、

光勝寺の過去帳をみると明治十三年に、

「釈尼妙貞七月一日新町白石善三郎妻サダ釈尼妙蓮七月

一日

白石善三郎(豊前屋)抱人イト事古二人善三郎ト共ニ

大洪水ノ為居家流失一本橋(橋名)吉平ノ竹藪ニ掛リ

善三郎ノミ竹枝ニ取着夜明ヲ待チ一命ヲ助ルヲ得タリ

「ねれ仏」について記されたものは見当たらない。ただ「五ヶ瀬川水系の水害史」に元延岡町長故小林又次郎の記録がある。これには明治十七年と記されているが、この文の最後に「一妻二人共に流失した姓名不詳於来」とあるのは、前記光勝寺過去帳の「抱人イト」お米」であり、「橋名」は「吉平」、「亭主の某」は「白石善三郎」であり「養母」は「妻サダ」ではないかと思われる。真疑はさておき次にこれを紹介する。

「柳沢町新町の境界道路の南端東側(現柳沢町喜楽湯のところに)には金丸と称した中町カンと云う美人の女養子の宅があり藤本止四郎の妻には山内幸吉、黒木源吉伝蔵治の宅(某東側道の中に吉田藤四郎の紺屋があり藤井英蔵(現延岡商工会館の位置)の南隣は草庵で天竺しの蒲仏があつた。今三福寺の境内にある花崗石の石仏がそれである。草庵の東に鋳物師の坂口佐十郎(明治十年の役に大砲を作った人)の宅等があり、三町条(三三〇米)東の畠の中に橋吉や田中駒吉の妻があり今の鉄橋の辺である。

此の辺は四面広漠たる衰畑で橋吉の前から東の方葉種畑を

経て東部が傾斜で其の先に棺付場があり道の両端には櫓の
並木で秋の紅葉は一入の美観を添えたものだ。櫓の南端
知中で明治十年の役に薩軍が間諜三人を斬首した余輩の記
憶を辿れば、始めの一人は三度目に首が落ちた。無論刀手
の未熟に起因するのである。斉藤猪瀬造の兄猪瀬造である
三番目は記憶に存して居ない。明治十五年に早竹と称する
ものが笠原大寺を斬ったのも此の処である。早竹は勇らし
く腹を切つて死し大寺は四十八ヶ所の重傷を負ひしも幸に
致命傷を得なかつた。明治十七年の大洪水に一家三人共に
流失した姓名不詳於余と称するものの家である於余は櫓吉
の北の方畑中に腰刀を砂に埋めて死体となり事主其は櫓吉
の裏手の藪中に養母の死体と共に漂着していた。斬くの如
き広漠たる地帯が洪水と共に流れ去つたのである。』

市内山下町尾坂で郷土玩具々作り猿々をつくつておられ
る三浦宮義孝人の語

「私は明治十三年生れの双生児です。現在の中央ロータリ
ーのあるアツマヤ商店のある角が私の元居敷で大きな家で
した。生れたその年大洪水があり、二階の窓から手をさし

伸しおむつを洗つたが、二人ではあり乾わかすのに大
変だつたとよく聞かされました。」

また、〃ぬれ仏〃については、

「ぬれ仏のあつた所に渡る橋を囚人橋と書いて「じゅうじ
ん橋」と読んでいたが、船板で通つた四間か五間の橋であ
つた。囚人橋の北側に南無妙法蓮華經と刻んだ高さ五尺、
巾一尺二寸位の御影石の碑があり、すぐ上は進藤清さん河
野しよう頃（河野三夫氏祖父）さんの家があつた。この付
近によく水浴びに行き、身体を干したものです。」と。

大正元年の大洪水と山津波

大正年間の大洪水は、大正元年十月の洪水と大正七年七
月の洪水といわれ、特に大正元年の洪水は北川水系の有史
以来最大のものといわれている。

北川ダム建設による大分県電気局の調査「北川水系にお
ける過去の洪水実績」に、『大正元年の洪水Ⅱ下赤公民館
の玄関コンクリート敷天端まで洪水位が上がる。E.L.四二

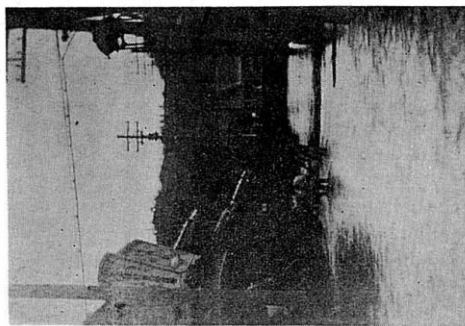
・七〇M（推定）。昭和十八年九月の洪水Ⅱ下赤公民館の
玄関コンクリート敷天端より〇・五〇M下まで洪水上がる
E.L.四二・二〇M（推定）』

とあり、昭和年間大被害をおこした十八年の洪水より水高
（みずかさ）が五〇センチも高かつたとしるしてある。

大正元年十月一日、二日、台風により鹿児島方面に大被
害が発生したが、延岡も甚大な被害があつた。中でも行徳
山の雄岳の山崩れ、山津波がおこり行徳川が大氾濫、十月
二日午前六時ごろ新川（舞野町）では民家七、八軒が流失
し、吉良ともさん及び孫の三人は梁の下敷となり、無
惨な落命をした。（下舞野神社氏子総代佐藤仙次郎氏調）

大正七年の大洪水

大正年間最大といわれる大正七年七月十二日の洪水は、
延岡市街で一番地盤が高い中町まで全戸床上まで浸水し、
町中を川舟が行き来し、恒富堤防、現在安積多橋南詰付近
が決壊して浜川に流れこみ、方平和寺墓地の一部を洗つ



大正七年の洪水（今の市役所東通り）延野しのぞき撮影

た濁流は山北部まで一キロ余、巾一五〇米の田圃を川原
と化し、一方、岡富（昭和町）米迎寺墓地も洗われて白骨
が露々たる大被害が発生した。

宮崎地方気象台及び延岡測候所の資料によると、七月十
一日から十二日にかけて日向灘を海岸沿いに北上した台風
であり、東臼杵郡は大被害が起つた。

真白井郡の被害

死者二人、行方不明一人、傷者五人、家屋全潰二二戸、
家屋半潰三二戸、家屋流失三六戸、床上浸水四、五二二

戸、床上浸水二、九〇七戸

七月の雨量表 観測所 真白井郡役所
北方 北方村役場

日	北方	観測所
1	—	—
2	—	—
3	—	1.8
4	—	2.4
5	—	2.3
6	—	3.6
7	—	1.0
8	—	2.3
9	—	50.8
10	—	100.4
11	—	240.3
12	—	0.9
13	—	6.0
14	—	2.7
15	—	6.6
16	—	7.0
17	—	35.3
18	—	7.8
19	—	30.5
20	—	40.7
21	—	16.0
22	—	70.4
23	—	3.2
24	—	40.9
25	—	10.7
26	—	27.5
27	—	0.2
28	—	0.2
29	—	—
30	—	—
31	—	—

※「北川、梶子川の鉄橋水と人命救助死傷」の項を参考にされたい。五ヶ瀬川の洪水は、観測所が深いので本雨量表は
ただ参考まで。

この台風は最低気圧が岡山で九七三ミリバールを記録し
全国の死者四七一名。

なお、この年は洪水の当り年で、六月十五日、梅雨前線
による洪水があり、七月には台風が三回接近し、二十日と
二十四日にも出水があつた。

大瀬川水害予防組合副会長山本七郎さんに聞くと、

『私の日記は、まことに簡単に「七月十二日（旧六月五日）
暴風雨大洪水」と書いているのみですが、安賀多橋の際

が切れ浜川に流れ込んだが、一口に申せば、浜川右岸全線
と答えるべきと思います。出北渡場が決壊したのは午前七
時半で、浜部落に浸水したのは八時とされた。この三十分
に亘る間、浜砂前面を丸々島下迄。西は方平（ほうびら）
、別府西を別府川を越えて伊達前を浜部落の西側を平原
下に水深一米程に没したので、激流を漂流しつゝあつた。
お察し下さい。井ノ川迄影響したのであります。』
新町の料理屋々戸高草々戸高理吉の娘は、この堤防決

壊の様を二階から見ていたが「大瀬川が傾いた。」とい
つており、手をたたいて喜こんだそうだ。それというのも
この堤防決壊がなければ川中地区の被害はまだまだとれた
け激しかったかわからない。

恒富堤防にはこんな話がある。延岡町(川中)と恒富村と
は対岸であるため、延岡町を監視し、洪水がおこらないよう
に延岡高校正門前から丸ヶ島までの間、築堤工事を大正四年
に計画し、大正九年完工の予定であつた。大正六年には大
瀬橋まで完工したが、安賀多橋下は昔の村境(舊薩組合
競馬場があつた)で、恒富村ではなかなかウーンと云わない
恒富村長日吉幾治と恒富村代表眞会議員鈴木憲太郎(後の
延岡市長)との掛引が続き、大正七年には工事進行という
矢先の災害であつた。』

× ×
当時中町居住の壬手カヨ(旧姓河野)さんの話

『私が小学校高等科一年の時、大水の前夜は中町上組、
あん粉屋佐々木の伯母さんの家に泊つておりました。七月
十二日の午前五時ごろから中町筋が浸水しはじめ、一番出

たのが、何時ごろでしょうか。中町中央にあつた斎亭(一
料亭)、その西隣の第百四十七銀行支店(現毎日新聞通信
所)付近が延岡町で一番土地が高いところですが、あの付
近で一尺五寸(四十五センチ)ぐらい、壁がつかつか
らぬ位の水嵩でした。勿論、川舟が中町筋を通つておりま
した。洪水の後、水質に付近の人々が驚きに行つたも
のです。また、延岡小学校は今の市役所にあつたが、浸水
の跡かたがついているのを見ると、校舎教室のガラス障子
の下七・八寸位のところに線が残つておりました。(推定
一・五〇米)』

× ×
昭和町来迎寺住職高久欣浄師の話

『大正七年の洪水はとても大きかつたもので、この来迎寺
墓地のお墓が三百基ばかり洗われて、お骨が沢山露出し、
誰のお骨が判らず、父(高久大鑑師、大正十二年二月没)
は糸(ざる)を持つてお骨を拾つて葬いたと、よく聞か
れました。』

× ×

筆者が小学校四年生、南町仲田薬店（現延岡地方協同局）前に住んでいた時のことです。私の家は大きく、表から裏まで三棟十五間も続いていたが、表の水位が〇・九米裏が一・三〇米位浸水した。屋敷の南側は石垣で一段低く、専念寺の土地に続いており、その石垣の高さが約一・五〇米あった。

現延岡警察署の建物は大手門のあった地で庁舎の南側付近に電信柱が沢山小鎮であつたが、この電柱が水に浮いて南町を流れ、その一本が家をかすめてガラス戸を打破つた。また川舟で下から避難してきた老人を仲田薬店の軒から二階の窓へ苦心して運れこむ情景や、藤原酒店の店員が加勢に来て、自転車を手井に吊した情景などが頭に焼き付いている。大手橋がまん中からはつきり折れて落ちたのもこの洪水か？

昭和十五年の洪水

九月十一日・十二日の洪水は安寛多橋で五・三三米。木

地は大湖となり刻々押寄する洪水に耐へかね橋小路の破堤を見、急流は奔馬の如く市の心臓部中央街を瞬時にして押まくり父呼々、母呼々阿鼻叫喚の巻と化し濁流は大瀬川に向つて落下し屈間石堤なるため容易に減水せず罹災者の救助愚ふにまかせず五ヶ瀬、大瀬川は益々荒れ狂ひ木材が家財が折重つて流れ去る暗雲低迷水魔の醜態に茫然とたたずむ。

ああ家が人が声をかきりに救を求むるも救助の途なく、大風雨に怒濤にとざれくぐに悶ゆる叫び西門寺島の高野今朝蔵さん一家九名、慈島の浅井百吉さん一家七名、横山代吉さん一家五名等、流れる屋根上で横山あや子さんは主人が出征中で港口に於て無心に愛児に最後の乳房を与へ、そのまゝ大海へ、或る一家は晴衣をつけて避難の寸前に押流され死の晴衣となり日の丸の旗を打振り溺落に別れをつげる等、其の悲壮なる場面／＼以上は五ヶ瀬川水系の水害史々に風ゆる五ヶ瀬川の河口におこつた記録である。

この水害で死者行方不明九四名。負傷者二二五名。流失家屋四九五戸。半壊四七六戸。浸水家屋一九、八二三戸（

二六〇

橋の大瀬橋が流失し、コンクリートの須崎橋も南側約五分の二を残して流失した。大瀬川左岸坂小路堤防外側の川沿いには直後約七〇センチ、天然記念物にもなりそうなたうの大木や柳、樺、竹などの中に朝鮮人部落十数戸があつたがこの洪水で流失した。

県下の稲は白穂となり、その被害面積は三万六千町歩といわれる。

最近、消防署、消防団が水防工法訓練を行なっている大瀬堤防の本郷がテントを張る築洲付近に柳が一本あり、洪水に流され溺死寸前の人がこれにすがりつき警防団決死の救助作業が行なわれ、あやうく一命を助けた一幕もあつた。

昭和十八年の大洪水

九月二十日五ヶ瀬川筋、野田右岸堤は溢流決壊し、大瀬川筋大貫の左岸堤は破堤、市内亀井神社裏手の工事未完、大瀬川堤防と坂小路の堤防の取付排水門の工事中で瀬流は四ヶ所より浸入し野田、大貫、野地地内三平方キロの田畑宅

以上は延岡市、南方村、北方村、北川村を出した。

この台風は二十日午前六時、沖縄の東を經て佐多岬から日向灘を北北東に進み、正午高知県の宿毛に上陸しておりこのときの降雨量は

十八日延岡二〇九・三ミリ 高千穂 一〇七・〇ミリ

十九日延岡四七五・三ミリ 高千穂二九一・〇ミリ

× ×

須崎南詰の橋脚が崩れて、洪水見に立っていた子供達十人の命をうばつたが、五才の愛児を亡くした中島町二丁目金田カツさんは「九月二十日の屋すき須崎橋（惣領側の袂西際が崩れかかり警防団員等が出動して堰にガラ入れ作業をしていました。この人たちが茶のみに帰つたすぐ後のこと、洪水見に行っていた子供達が縄張りをつくって外に出、アッという間に居なくなつてしまった。子供達十二人（青年一人を含む）が土砂と共に転落したのであります。姉が弟をおんぶしたまま土砂の中から発見されたり、一家三人の子供を亡くした人、砂の中に埋つて足のみ出ている子、五日ほど過ぎて誰か見かきが出来なくなつた子、今

二六一

日まで遂に発見出来ない子など十人が亡くなりました。甲斐守さんは舟に乗っていたが、子供が流れてくるので引揚げるとそれが自分の子供であった。私の子供も今生きておれば二十八才ばかりの青年で……』と悲しい思い出を語ってくれた。

× ×

大分合同新聞記者 本清一さんの話

昭和十八年の洪水は延岡はじまつて以来の大被害をあたえた。五ヶ瀬川堤防工事の天下橋下、野田の南方小学校付近が切れ、流れ込んだ水のはけ口は桜小路の堤防を決壊した。

二十日の夜明けとともに土地の低い桜小路一帯は徐々に浸水をはじめ、私の家はまだ堤防が切れぬ前、すでに床上二尺も上っていた。二階で飯を食べていると付近の人々はみな避難している。こりや自分達も避難せにやいかんわいと隣にいろいろ乗せて長谷川ヨシさん宅に避難した。この時は、もう水が首まで来ていた。長谷川の二階で、五ヶ瀬川が危い！亀井神社裏の堤防が危険だ！と五ヶ瀬川の方を

二六二

気遣っていた午前十時すぎ、武田新聞店の主人が桜小路堤防の上を車に向かって駆けて行くのが見えた。こりやいかんわいと不吉な予感にうたれた瞬間、津波のような怒濤が打撃は愈々ぐんと水位が上がる。

長谷川の二階の窓を出て、屋根から屋根をわたり、ロープを使ったりして城山に逃げた。城山には拘留所の囚人など沢山避難していた。

あの洪水で、私の家はもうないと思っていたら、家の隅にあった二本の杉の立木が家をかばい、二階の上三尺も水位があつたにかかわらず助かった。この杉に流家がひつ掛けて流を変えたため隣の順道館道場が押流された。

差し出した金櫛につかまつたが、これが折れて死んだ人ようやく屋根につかまつたが、その拍子に嬰兒をとり落して死なせた人。桜小路でも沢山な死人が出ました。

九死に一生をえた山津波

北川を廻り熊田で本流と分れ、日豊本線沿いの分流を小

川（こがわ）と呼ぶ。市棚駅の北を鏡川（あぶみがわ）とまた呼び名がかわり、大分県との県境を越えて重岡に入っている。一方葛葉から北東、北浦村に入っているのが下瀬川（しもづかがわ）と呼び、そのまた支流で大分県境の分水嶺、中ノ嶺（五四九）から谷を下り陸地（がらち）柚ノ内、矢が内、下流に松葉（北川村）という小さな部落がある。この辺ではちよつと人に知られた松葉観音のあるところ。

現在延岡市立西小学校々長平田愛蔵先生（明治四十一年三月生）に、延岡で大水害が発生した昭和十八年九月二十日の同じ日、松葉部落で山津波に遭われた当時の話をうかがった。

『十九日からの豪雨で水かさが高くなり、狭い谷間に潮流があふれていた。朝起きた時は小さな田圃や校舎跡はすでに水につかり、私がおった校長住宅の入口まで水がきた跡がついていた。』

減水のようなが見えないので聲をあげはじめた。午前八時すぎから九時ごろであった。ゴゴゴーガラガラ不気味な

音を耳にした。雨戸の隙間からのぞいてみると、対岸の山の尾根に近い高い斜面が動いている。『山崩れだ！逃げにやいかんよ』と妻に云つたか云わぬうちに足もとから払いとばされたような衝撃を受け、どうなったかわからない。

無我夢中、浮いている腐屋敷に這いあがりながら流れていたが、幸い水の上に枝を出した木の下を流れる際に木に這いあがり、丘の上の校舎へと這いこみました。

対岸の山腹の崩れた岩石の流れが、谷一ぱいになつていった流れを一瞬せき止めるようなかたちとなり、一時的にダム状態が出現し、堆えられた岩石が忽ち溢れて急激の状態となり、その潮流のはこまきが家屋へぶちあたつたものと思われます。

五万分の一の地図でも大体わかりますが、小学校のある丘の向い側に松葉観音と下塚神社があり、下塚神社の石の鳥居の柱が川を越えた学校のある高い所へ、八〇米から一〇〇米も押し上げられていることから、その物腰さを知ることが出来ましよう。また神社付近の前、上流に泊う田圃の石垣はこのため上流へ洗い返されているが見られま

二六三

す。

校長住宅の私の居た家は一番西で、点々と三軒の家があり、三軒とも地盤から洗い流されました。私は妻と子供の二人を失い、お隣の渡辺藤吉さんは一家五人のうち四人が死亡、東方にあった片岡さんは距離もいく分べだつており学校へ上る坂道の築地で流れを妨げたせいもあつて、僅かに身を以てのがれることが出来て一家族は身一つで助かりました。

私の妻は一キロばかり下流で翌々日死体を見つけてもらい、一週間程後に子どもも四キロ程下流で見つけてもらいました。私は熊手で振かれたように全身傷だらけ、身についたものは腰股の紐一筋と云つたところ、おそろい睡のえつり竹の破れめでも届けて浮かびあがつたものでありましよう。深い傷がなかったのが助かった一つの原因でしょう。『と九死に一生をえた当時の恐怖を思い出されながら掌の傷の跡を見せられた。

※付記Ⅱつり橋を渡って対岸、一〇〇米程下流の道傍に長野一重氏（学校の若い先生）の住んでいた小さな家があり

と部長にいわれ、帰宅したのは午前十時半頃だった。当時、私の家は現在の延岡警察署建物のすぐ南隣り、児童公園になっている所で活版印刷所を営んでいた。二人の子供を南町区長伊東久次郎さん宅に預け、隣組の人達と安宿多橋北詰めに陸開閉鎖用の叫ばりに出動した妻もいま帰る、子供を迎えに行つたところだった。家に入ろうとして、ひよつと南町本通りを見ると、潮流が白波をたてながら自動車の走るような速さで走つて行く。わが家の方にもとどん来るではないか。

こりや一大事！わが家に飛びこみ、妻に急を告げながらすばやくモーターの取外しにかかった。床は全面板張りで、印刷機械器具も相当あつた。水は何処からともなく浸入して、モーターを取外すと同時に板張りの上までやつてきた。子供は、国民学校（当時の学校はこうよんでいた）二年七才と五才の女の子。「あんた達は、お利口さんだからここでおとなしくしていなさい。」と座敷において妻と二階へ品物を運ぶこと七、八回、子供は「母ちゃん、ぶーちゃんがーぶーちゃんが来たよ」と水がきたことを教える

二六四

川面からはかなり高所となつていたが、ここも一通り洗われた。長野氏は現在中川姓、熊野江中学校教諭在職中。

昭和十八年大洪水の思い出など

水害が増すのは陸開に土俵を築くのが間に合わないほど速い。

徹宵警戒に當つていた警防団は各々の受持区域の堤防を守つたが、私たち第十二部（南町、中町、北町混成）は夜明けと共に部員を配して五ヶ瀬川右岸、北町の陸開閉鎖に當つた。午前八時ごろ「稲見下の陸開が危い。水が浸入しているから早く来てくれ」と伝令がとどく。

居ヶ塚忠次郎部長以下幹部は現場に急行した。戦争中のことで、住民男女（女はモンペ）数十名も出動して陸開閉鎖に懸命である。刻々増水がひどく、全員息つく暇もない活動ぶりである。

団員を交替で朝飯にかえしたが、一匝帰宅すると疲労もあつて、すぐには出て来ない。「あんたも帰って来なさい

水あしは以外に早く、子供は最上一階に浮いているのであった。

子供を二階にだきあげ、そのあと何回品物を運んだか？ものの三十分もたつたに床から三尺も水が上つた。工場の機械や活字棚は依然として定位置にあるが、壁が浮けば床板も浮く、水屋が倒れる仏壇もタンスも浮いたり倒れたりあまりにも浸水が速いので何もかも諦めるより仕方がなかった。

「西村さん助けて！西村さん助けて下さい！」と南隣りの田崎さんが叫び出した。田崎さんとは板壁一枚だが四尺も水がきては動きがとれず、どうすることもできなかった。子供のいる二階に上つて間もなく「西村さん、西村さん、窓をあけてくれ」と、高い所から田崎さんの声がする。

二階南側の壁、六尺ばかりの高さの所に二尺角ぐらゐの明り窓があつた。この窓を打破つて活字棚を梯子に田崎さん一家六人を導入した。田崎さんは萬千穂町の人で、名は敬太郎。この日は親戚である萬千穂町の田崎医院の御主人も連座く敬太郎さん宅に泊つていた。田崎の家は延岡肥料

二六五

合資会社の肥料倉庫の裏で、中二階があり、玄関わきに窓の木の一本あったが、この窓の木をつたって屋根に上り、肥料倉庫と大屋根間に私の家まで避難されたのであった。ことに敏太郎さんは独眼の老人で、一歩あやまれば潮流に落ちこむのである。全く命がけの避難であった。

原田三郎さんという鉄工所の主人が五十米もある所から屋根伝いに一升瓶で水を持って来た。急激な浸水で食糧も飲料水も用意する暇がなかったので腐しかった。

洪水は地表から七尺五寸(二・二七米)筋向いに雑屋という旧家の大きな油屋があり、軒が低くて、水との高さに余り開きがない。この雑屋にセバート木が頭いた。つないであった鎖をはづす暇がなかったらしく悲しい声で何時までも鳴いていたが、ついに溺死した。

普通の家より高い私の家が、これだけの水なら、土地の低い新町や船倉町はおそらく全戸の家が流失しているだろうと話したものである。

× ×

○警防団員の二、三名は中町のもと町役場前の団員詰所で

水にあい、そうこうしているうち逃げ場を失ない、石の門柱の上にとりついて避難したとも聞く。

○大瀬川左岸、桜小路の堤防が決壊、中央部市街地全戸が浸水したが、この中央市街地の水位が五ヶ瀬川より高くなった。そこで、この水が北町側三福寺裏の堤防約二百米に内から外へ逆に落差二米で堤防から五ヶ瀬川に流れ込んだ。これを見た北小路側の人々は、「さながらナイアガラ瀑布のように壮观だった。」といっていた。

○被害を大きくした桜小路堤防の決壊は、牧場の隣が二〇米ばかり切れ、地盤面以下二米も埋れてバラスの河原となっていた。少し下の送電線鉄塔の付近も切れて、川舟が横に引掛つて水を堰きとめていた。

○本小路は土地が低いので、軒並に二階まではほとんど浸水したが、佐藤薬店前、桜小路からの架道りに仲さんと云う眼のうすい按摩さんが居た。この仲さんは、二階から足を滑らして決壊した潮流に落ち込んだ。奔流は仲さんを跳ね返し、筋向いである城山登り口の日平商店の二階に救いあげられた。

○南町延岡警察署の筋向いに伊東酒店があり、ここに食糧品組合があった。戦時中の物資不足は特に甘い物がひどかったが、配給用の白砂糖を全部ぬらしてしまい、どろどろの砂糖を配給した。

昭和二十年の台風

大東亜戦争は敗戦と終って間もない昭和二十年八月二十七日と同九月十七日の二度にわたり大暴風が襲来した。後者は有名な枕崎台風(台風番号四五一六)である。この台風は水害より風の被害がひどく、空襲で残った家屋の多数が倒壊し、さらに樹木の被害が目立って多かった。

〆種さん〆の襲来で知られた天然記念物(昭和三年九月假指定)は樹齢三百数十年、周囲目通り六・六米、高さ十余米もあったといわれる川原崎町の瓊。土々呂町霧島神社の象徴といわれた〆がよと松・よろい松〆の二本(白蟻の害をうけていた)、須佐町熊野神社の檜の太木(直径一・七米)二本。今山八幡神社の屋なお隣り参道その他が露出する

まで裸になったり、亀井神社参道の杉の名木十数本等も倒れてしまった。これ等の被害はどちらの台風であつたか区別がつかぬが、後の枕崎台風の方が大であつたといわれる。

○枕崎台風

上陸時の中心気圧九一・六ミリバール。半径六〇〇キロ。主な被害地〆西日本、特に広島、愛媛、鹿児島、宮崎。

死者二、〇七六。行方不明一、〇四六。負傷者二、三二九。全壊家屋五八、四三二。流失家屋二、五四六戸。浸水家屋二七、三二四。広島県広島では山津波で死者一、二二九人、鹿児島では二米以上の高々あり。

延岡市消防署佐藤隆治士長談

私が鹿児島県バンセイ(アオト)飛行場から復員の途中八月二十七日夜、復員兵数名と日豊本線高鍋駅に一泊した。その夜はとても物凄い暴風雨であつた。何時間たったか? 風も止み明るくなつたので夜が明けたものと思つてみるとそれは台風の眼であつたらしく、またまた大風となり高鍋駅が倒壊し、付近の民家も倒壊した。私は駅舎の下敷と

なつたが幸いにも^{おし}庇の空面にはさまれて顔面と左手を負傷しただけで済んだ。

職員や復員兵達十二三名の死者が出たように記憶している。衣類などの持物から海軍復員兵が多かったようだ。野舎等の建物は空襲のためゆるんでいたらしい」と左手の疵あとを見せてくれた。

ルース台風と旭化成寮生の活動

ルース台風（台風番号五一五）は昭和二十六年十月十四日鹿児島県に上陸、九州を縦断した最大級の猛烈な台風で、中心気圧九二七ミリバール、風速七四・一米、西日本は大暴風雨にさらされ、死者行方不明九四三名を出している。延岡の水位は安賀多橋六・〇五米、板田橋五米、昭和十八年以來の水増であり、市の損害七億円といわれている。

この日夕刻、「東浜砂住宅付近が危険にひんしている」との情報をうけ、私は加藤消防長の命により吉田一消防士等数名と、かねて出動協定が出来ていた旭化成寮生二十余

名を率いてトラック二台に分乗し東浜砂に出動。現場に着くや、早速く作業を開始し、崩の土を掘って土のうを造りはじめる。

毛無し浜、切れみなどは崩砂のため切れて一面海に続き日向灘から打寄せる怒濤は巨波を打ち立て、水面に僅か頭を出して居るサギ鳥に打寄せている。東浜砂の堤防は太平洋に続き、あと六、七十センチで溢水するかも知れない。（実際は一米あつたかも知れぬ）

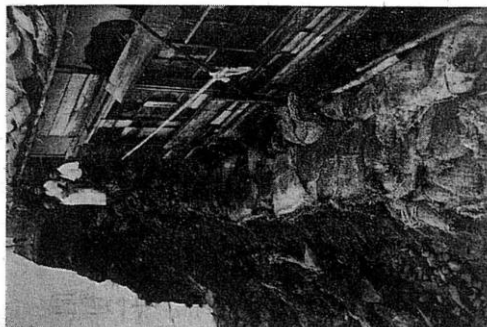
もしも、この堤防が決壊したなら作業養生中の寮生は全員溺死し、谷底の如き東浜砂住宅は勿論、妙田、浜砂、惣領、金重、出北、別府から旭化成各工場まで奴ら泥海と化するかと思うとゾッとした。

既に暗闇が迫って誰の顔も見分けがつかぬ。土のうは四五十個も出来、その一部は堤防上まで運んだが、猛烈な強風に一歩踏みはずせば、これまた溺死は間違いない。

そこで、作業を中止し東浜砂団地三十余戸の住民避難に切替え、全員で全戸くまなく回つたが、住民はすでに避難しており、残る四、五人を発見したので自分達と一緒に

動するよう命じた。運重く乗って来たトラックの二台が故障しエンジンがかからない。照明もない真つ暗闇で一人で歩くのは危険であるから、やむなく避難民を車に乗せ、寮生と署員はトラックの後押しをさせる。そして約一時間後の午後八時すぎ、署にたどり着き、避難民は延岡裁判所に無事収容した。

北小路の石垣崩壊現場の土のう



ホッと息つく間もなく次の出動が待っていた。「北小路の隣門付近の石垣が崩れて危険である。」との報が入り、寮生、署員六、七十が出動した。寮生は現警察署西側に当る空地で土のう造り、署の主力は岡富分団々員數十名と北小路崩壊現場作業である。

出動した署員は湯浅、真藤、吉田梅、熊野、柳原、清成、武藤等の大半であつた。作業は相当危険が伴ない、駄目だというのを押切り、随頭指揮に当つた湯浅本部次長は「消防団員もよく働いた。旭化成寮生は引続き数百個の土のう造り。後方活動ではあつたが小言一つ言ふ者もなくよく統制がとれ、キビキビした活動は賞讃して余りあります。」

崩壊現場は相当な流れのある五ヶ瀬川の川べりや狭い露路で、股まで水につかつての命がけの作業。危険を感じた者は体に命綱をかける者もあった。被害現場は大久保漬物店西、野村義彦郷部相の裏で、野村さんは懐中電灯を照してくれた。あんな時は少しの協力でも大変有難い。」と語る。

昭和二十九年四つの台風

台風銀座とよばれるが、この年には続けざまに四つの台風がやって来た。

終戦後はアチャラさんの女性の名称でデラ、ジュデイス、グレイス、キジャなどと呼ばれていたが昭和二十九年から

岡富小学校の避難民



刻々増水、十八日午前三時半大瀬川六・二五米となる。屋頂には風雨ともおそろし午後二時半、三班に分れ調査に出る。(以下省略)

◎九月七日十三号台風襲来
(前省略) 天候の機嫌が悪くなり、夕方、林田(爲)医師が雨に濡れながら注射器を持って来て注射してくれた『まだ出勤は悪いと云った。』が悪くなっても署員の悪気にも関係があるので、今の様に具合が良ければ出て行くと云う。

午後八時、突風を前にて出勤したが、台風はその頃が峠であり、水量も少なかった為、消防本部に避難した連中も午後十時頃には帰宅をはじめた。八日午前〇時解除(水防管理本部?)自宅待機となり帰宅。

◎九月十三日十二号台風襲来、大洪水

大瀬川安賀多橋の量水標の目盛りは六・五米までしか記していない。それが九月十三日午後五時から翌十四日午前一

二七〇

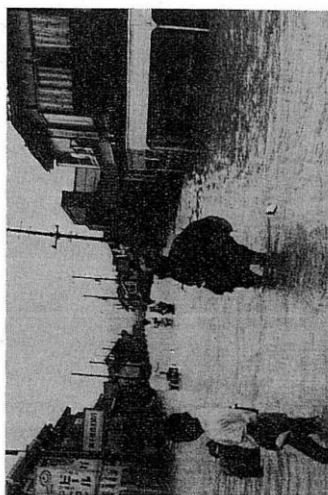
台風の発生番号で一号、二号、三号と呼ぶようになった。

◎先ず八月十七日襲来の五号台風(グレイス)である。私の日記には次の通り記している。

『台風は新聞其の他の情報によれば沖縄より朝鮮へ、或は長崎県を通過する様に報じていたが、ラジオの情報が報を重ねる毎に情報が悪くなり、後には鹿児島(こしき)か阿久根より延岡へ抜けるものと思われる」と云い出す。天気次第に凶悪となり午後一時、市に災害対策本部が設けられ、午後二時水防管理本部が至急行に設けられた。署及び団では朝より築の名の堤防工事現場が危険とみられ、延滞り工法による全長七十五米の作業を行う。

本部では夕食も炊出しを行う事になり帰宅せず勤務の準備、夏期訓練休暇中の湯浅次郎は四時頃電話があったが午後七時すぎ出勤、伊藤士真は上京に帰宅中。午後六時頃より本部には避難者が現われ、次第に数を増し、後には三百名を数ゆ。講堂より次々と部屋のあけ渡しを行ない二階の各室はほとんどを提供するに至り、人いきで異様な騒ぎとなる。

時まで八時
間の間その
量水標の目
盛をオーバー
したので
あるから正
確な水位は
いえないが
消防署水位
観測員の推
定によると
七米以上(二
丈三尺)あ
つたものだ
といわれて
いる。また



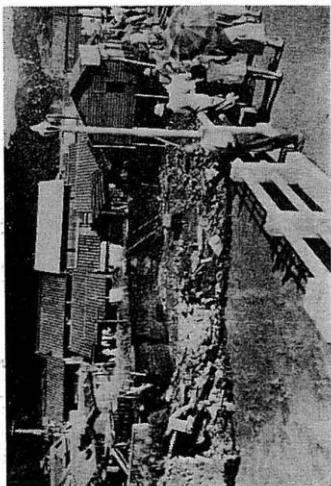
北小路の浸水 (延岡春秋社提供)

大瀬川左岸の石垣堤防は〇・六〇・八米下まで来て強風のため波飛沫が打越していたという。署、団不眠不休寸

二七一

た高所から大瀬橋北詰まで行って驚いた。

橋脚が崩壊しはじめ、某自転車店の客車の半分が已に落



大瀬橋北詰の崩壊現場 (タリデイリー社提供)

下し、崖ぶ
ちのように
なり、陳列
された新品
の自転車
が渦まき
渦流の中
につぎつ
ぎ落ちて
行くのを見
た。急迫し
た状態を一
刻も早く付
近の住民に
知らせ、避
難させるべ

く、班員を指揮して大声で一軒一軒叩き起して避難を呼び
かけた。地元の消防団員にも連絡したが集まらない自家が
浸水してははたどうにもならないのだろう……。』

× ×
◎九月二十五日、二十六日日記

(前省略) 硝子戸の打つけをなす。時午後十一時半。雨、
風共大した事なし。小雨、小風の中を徒歩で出勤する。署
には加藤消防長、湯浅、大里副次長が居り、パンの用意が
してある。

午前三時前降風速(消防本部測定)五十米、時速八〇
キロ(中央気象台)甲斐利明消防士等は署に出勤するの
に星をいくつも見たという。中心が通れば急に風止み、白雲
の向を變えて飛ぶのが見うけられた。以後はほとんど小雨
も無く水量も大瀬川安賀多橋で三米。午前七時本部解散と
なる。

※この台風が所謂「洞爺丸台風」で死者行方不明一、七六
一名、北海道岩内町で大火をおとし死者三名、傷者五
五一名、三、二九八棟を焼いたのである。

暇もなしの大活躍は賞讃されている。大瀬川北詰の堤防が
大きくえぐられただけで決壊もなくすんだが、泥水は谷下
水口や湧水により中町通りの高地一部を残して殆ど家の
屋が浸水。本小路一帯から御沢町、新町等は一・五、二米
船倉町は日暮本線付近の堤防工事未完成のため下からせり
込み、水防管理本部の消防署控室は午後五時三十分遂に浸
水をはじめ、夜と共に〇・九米浸水、不通になった電話交
換台は全部取はずし退避した。二階の講堂は勿論、他の各
室も避難民があふれて執務にまで困難をきわめた。延岡洋
裁縫専門学校に救助にいたり、水が引いた後の消防署前で
船を手づかみしたこともあった。

御田福蔵消防士の家は浜砂町の堤防の外にもあったため、
ゴウ田宅と二棟流失し、石田、津山の二棟が半壊した。北
小路岩鼻の高地にある加藤大三郎消防士宅は床上〇・六米
浸水、古川町方面は山づたいで往復していた。

五ノ瀬川上流、国鉄日の影線第一、第五鉄橋の橋脚が流
失、鉄道が流れて復旧工事費三億円、セメントだけで二
千トン、労力延人員七万五千人に達した。国道はスタスタ

に寸断されて交通絶
日の影町その他流失家
屋約百戸。

吉田梅男司令

『夜なかの不明時、大
瀬橋南詰堤防が決壊に
ひんし湯浅正士次長が
付近の消防団員や旭化
成寮生を奮励指揮して
水防に当たっている事や
大瀬堤防決壊(現奥管
住宅付近)の報告をし
に備行し、再度現場巡
視に出、苦心して南町
にたどりついた。西に
向うに従って深くなり
初瀬所付近は骨がたた
ず、元常備消防のあつ

二七二

昭和29年9月13日・12号台風による降雨量

三ヶ所	三田井	見立	北の方	高千穂	細瀬	星山	菅原	五ヶ瀬発電所	五ヶ瀬取水口	水ヶ崎発電所	水ヶ崎取水口	道玄越
11日	4.5	3.1	18.1	6.1	2.8	4.4	5.7	7.4	4.3	8.5	4.2	8.0
12日	275.9	140.7	431.0	158.0	132.0	226.1	189.0	160.0	74.5	189.7	189.0	207.0
13日	411.5	150.6	527.0	185.2	138.0	欠	67.9	326.8	442.5	251.2	299.0	187.0

資料「防災気象」宮崎県防災気象連絡協議会発行

二七三

延岡の四河川指定量水表

河川名	観測所	平水位	通報	警戒	危険	堤防高
大瀬川	三ツ瀬	0.25	3.10	4.10	4.60	7.20
五ヶ瀬川	坂田橋	0.80	3.00	3.80	4.50	7.30
祝子川	祝子橋	0.91	2.50	3.10	3.70	7.30
北川	川島橋	1.20	2.80	3.20	3.80	6.00

北川、祝子川の鉄砲水と 人命救助決死隊

昭和三十六年十月二十六日といえば別府・大分間の仏崎付近を走っていた電車で土砂崩れがかぶさり、死者三十一

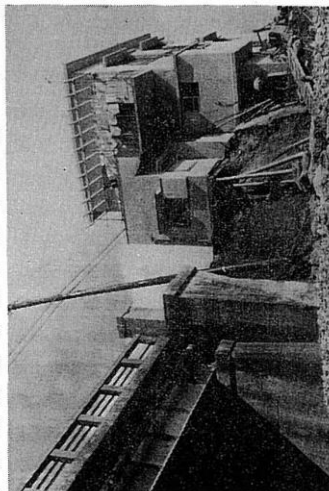
名は部落民松田敏六、松田健一と協力し、櫓の木まで二〇〇米を二回往復し、救助に成功した。救助に使った古舟は水だけ、櫓がなく本流に流されたら自分達の命もなかったといわれる。

同じ時刻ごろ「佐野の柿の木に三人のぼつている……」と引続いての報あり、鎌田司令補、加藤士長、片寄消防士の三名は、松田一文副団長の案内で山越えしながら救助に出動したが、村人の筏により既に救助されていた。

全日午後六時二十五分ごろ川島橋上流約四〇〇米の北川左岸の堤防が突然約二五〇米決壊し、濁流は川島部落約百戸が瞬時にして浸水してしまった。川島公民館の管理人田中源義さんは、そんな事とは露知らず決壊地点から一キロ下の県道を帰宅の途中、急性胃腸炎をおこし自転車をおりてかみこんでいた。暗闇の県道が周囲の田畑より二米ほど高いので足元を洗いはしめた水に、ようやく洪水に気づいたのである。彼はただ一人、そばの電柱により登り声を

名、他重傷傷者を出した凶日である。
二十五日午後から雨となり、粘りなは大雨と噂していたが、夜半から暴風雨となり風雨波浪注意報は洪水警報とかわった。停滞前線による集中豪雨である。二十六日午後〇時三十分水防管理本部が設置されたが、五ヶ瀬川、大瀬川の水位は気にするほどのものでない。しかし、北川、祝子川は夕刻近く急激に増水しはじめた。いわゆる鉄砲水である。
午後五時ごろ祝子川は危険水位（三・七〇米）をまたぐ間に突破して五米となった。坂宮では田圃に刈った稲の取り込みに夢中になっている間に逃げ道を失い、「逃げおくれた者が十数名いるから救助を頼む」の報に接し、太田消防団長指揮のもと市役所のダンプカーに川舟を乗せて坂宮に急行した。
逃げおくれた者は十一名であったが、既に五名は救助されて、後の六名（ほとんど女性）が二〇〇米も離れた濁流中に点々とある櫓の木に登って救助を求めている。派遣された伊藤、榊原士長、日高 森（貫）、松田消防士の五

限りに助けを求めたのである。
人命救助の急報に、山中消防団頭指揮のもとに直ちに二分隊が出動し、川島橋下に滞留中の川舟を曳きあげ、これに吉田司令補と太田士長が乗りこんだ。濁流渦まき暗夜を消防車のライトをたよりの救助作業は命がけを



昭和39.9.24~25、台風20号の水に洗われた榊原北詰の家屋。電柱は宙に浮き電線が倒れるのを支えている。タカディリー社提供

のものであった。

救助に成功した吉田司令補と太田士長は舟こぎのベテランであり、二人の呼吸が全く食がけの線で見事な離れ技をやつてのけたのである。ことに太田勇士長(現司令補)は深夜の東海川口付近をしばしば只一人で漁りに行き「太田いさり司令補」とあだ名のある位のつわものだが「殉職のことが救出まで頭にひらめいていた。」と云っている。

川島町今津玉木農園の玉木義明さんに被害状況を尋ねると、「危険視されていた川島堤防は、決壊と同時に怒濤の如く濁流が打寄せ、アツと云う間に床上まで浸水し屋までぬらした。川島本村も約半数は床上または床下を巨浪浸水耕地の被害は甚しく石原になつた分でも約五町歩(五ヘクタール)、田圃の土砂による被害約五町歩、家作り田圃復元のための応急処置に約一ヶ月を要し、甚しい所は今なお名残りを止めている。」被害地を青島の鬼の洗濯岩の如し々とは彼の名言。

水防倉庫に一人で一夜を明した武藤季雄士長の話

二七六

午後五時すぎのこと「川島堤防が危険」という知らせにより吉田司令補、佐藤士長と私は調査のためジープで出勤した。川島の堤防上を通過中すでに天端は浸水し、ゆらゆら揺れるのが感じられた。吉田司令補、佐藤士長は、この危険な状況を報告のため直ちに引返した。

一人残された私は部落民を召集し、水防倉庫の臥に土を入れさせ、四十三段の土壌固工法を施した。とたん、ゴーツという無気味な音とともに約二〇米が決壊した(中略)

水防倉庫前の人々が声をかけるので、見ると真暗な闇の中から白く長いものが出ていて、ソーッと背筋を走るのを感じた。よく見ると白髪の様だ。お茶をこみ走になり水防倉庫に一夜を明した。

建設省延岡工事事務所の牟田礼孝所長さんと延岡の洪水に關係のある河川について漫談的問答を行なった。

五ヶ瀬川は九州の屋根といわれる鞍岡(重宿日杉郡境)から源を發し、三ヶ所川と合流、熊本県馬場原(藤崎町)を流れて大きく迂回し、一方、阿蘇外輪山から川走川、旅

草川(共に熊本県)の水と合流、宮崎県に入つては河内川上野川、押方川、岩戸川、水ノ口川、日ノ影川、追川、日向川、網の瀬川、曾木川、細見川、行藤川と沢山な支流があり、旭化成の七発電所をはじめ計十数ヶ所の発電所があるくらい広範囲の水を集めている。これがもしも長崎県諫早地方に降った豪雨(昭32・725~26日、一〇三ミリ)のように、あるいはこれ以上の雨が降らないとも限らないが五ヶ瀬川の堤防は大丈夫でしょうか?また、五ヶ瀬川の長さは書類で見るとまちまちですが、何か定数でもありますか?

古書文獻で見ると五ヶ瀬川の被害は沢山見えるが、北川、梶子川については殆んど見当らないが如何なものでしょうか。また、東海の追内川など僅か二キロ位で旭化成火薬工場(昭38・8・9)は工場内が膝から腰までも水が出て池の煙は流れ出してしまった事もあります。北川、梶子川、沖田川(昭38・9・13堤防三ヶ所決壊)、井藤川(沖田川と同時に決壊)などの川と五ヶ瀬川とは水の性質が相違しているように思われます?

牟田所長談

川の長さの定数は、五万分の一の地図に出てくる一番距離の遠い所からで、谷川の水が常時流れていると認められる所から川の線が記入表示してあります。」と五ヶ瀬川改修計画平面図に印刷してある数字をさされ、「幹線一〇二・九キロ約二十六里」と云われる。

現在行なわれている五ヶ瀬川の堤防工事は、大体百年に一度の洪水に耐ゆるよう構築してあるもので、余裕高が一・五米あけてあります。利根川や淀川などは工事の規模がちがひ、流域の都市や耕地の状況から二百年三百年に一度の洪水に耐ゆるようにしてあります。諺早のような雨が、広範囲に一度に降った場合、五百年千年に一回という洪水の際には役にたちません。

五ヶ瀬川流域は耕地が広いので県の財政に大きな影響があるが、北川、梶子川は耕地も少ないので……

云われる通り北川、梶子川、熊本市を流れる白川などの水は鉄砲水といって、いま降った雨が、すぐにそのまま出て来るので集中豪雨の場合は五ヶ瀬川よりよほど被害が早

二七七

く発生します。

最も危険なのは、九州の尾根を北東にぬける台風、つまり、馬見原付近から佐伯方面に抜けるもので、五ヶ瀬川の広範囲のものと、梶子川、北川の鉄砲水が一緒になることでもあります。

※ 熊本市白川の沿道 昭和28・6・25、26 異常高潮により大被害が発生、熊本県小国町では一、〇〇〇ミリの降雨量あり、熊本気象台では6・26一日間の降雨量四二二ミミを記録した。

※ 北川本流は大分県より田代川、中岳川、系川、市間川の水を集め、下流に北川発電所あり。支流は日暮本流、北川の支流と北浦村より下津川が流れ、北川村熊田で本流と合流し、延岡港に至る。

磯釣りのまさごえに四人が溺死

黒潮流れる日向灘沿岸には磯釣りの釣場が多い。延岡近くでも深島、島野浦の一の磯、海士島磯、五丈磯、浦虎の二子磯、立磯、南場、鰐磯、東海の磯、万財の浜、鯛見山

の下、鞍掛
岬、麦ハエ
など沢山な
釣場がある
本鯛、石
鯛（こりう
お）、黒鯛
くちみ鯛、
いがめ、ち
ぬ、かれい
すずき、鯛
等々、なか
でも大物の
あなど十
五キロから



後方の島影がトマス崎

二十キロもあるしろものが釣れるから面白い。市役所勤務の大野さんなど寒鯛の大物（一五・七キロ、長さ九七センチ）を五丈磯で釣りあげ新聞に写真入りの記事になったこ

ともある。

然し、これも土用波がたちはじめると大変である。二三日間以前に降ろしてもらった釣場に荒波が飛沫を打上げ舟を寄せつけない。大事な一命をしばしば亡くするのである

昭和三十四年八月二十七日、市内大瀬町一丁目申菱釣具店の申菱建一さんは釣天鉤たち三人で小舟に乗り、大分県境に近い北浦村宮野浦の外海、トマス崎まで磯釣りに出かけた。翌二十八日早朝、事件発生の報により現場に急行した一人、伊藤計司司合補は次の如く語った。

『出勤すると消防本部は異様な空気に包まれている。前日北浦へ釣りに行った者が遭難し、すでに遭難現場と漁協の間の連絡をつけるため消防本部加藤大三郎士長は携帯無線を持参したといひ、私も市の早瀬助役、山中消防長、太田団長とシーブで北浦へ（駕乗経由）急行した。』

事件のおこったトマス崎付近は、海底の知れぬ紺碧の海で、静かな時は油を流した如く川より静かであるが、魔の海とも称する如く、九号台風の余波をうけて何時の間にか足をすくわれる怒濤と化してしまつた。件の三人はそれぞ

れ好きな場所に分れて釣っていたが、こんな波では迎えにも来られない。建一さんは大東亜戦争で負傷した不自由な足を踏みしめながら念力岩を透すくたとえの通り人間業とも思えぬ十米位の断崖をよじ登ることに成功したのであつた。他の同僚も同様別の場所で九死に一生を得て波打際に打ちあげられたが、建一さんを救助する余力はない。たまたま、その場所に宮野浦の漁夫が網を入れており、台風接近で網の破損を憂えて七、八人の漁夫が網揚げに来たのを見て建一さんは、てつまり自分を救助に来たものと早合点し、船上の人の制止もみかず、自分の泳げぬのも忘れて海中に飛びこんだのであつた。網揚げ船はそれを見捨ててるわけにもゆかず、近寄るうち転覆して全員海中に投げ出され、この中三人は遂に舟らぬ人となつてしまつた。ついに四人が溺死したのであつた。

北浦村では松井村長が陣頭指揮、助役、吏員、消防団等数十人が出勤し、みな、わがことのように心配し死体捜査に当たったが、延岡市消防団では長野開分団長以下救護の船に団員を乗せ来たり、潜水夫五名を中心に大掛りな死体

捜査陣となった。そのうち漁夫三人の死体は収容されたが、建一さんの死体は仲々見当らなかつた。地元の人々もこれを最後と船を出した。その時、父親が延岡からはせつげ、これに同乗し遭難現場に向つた。この父親の姿は合葬して吾が子の名を呼びつつ遺体収容の出来る事を天に祈る様子がはつきり見とれた。』(以下略)

× ×

波岡茂、市管財課遭難捜査(38・6・10)

私の日記には、こんなに書いてある。『消防署が発行すると聞かない朝の点検前、鎌田司令補と二人が呼びつけられ「市役所管財課遭難捜査(51)」が赤水の鰐掛棚に魚釣りに行つたまま行方不明になり、(私は)昨夕七時から現場まで行き、山坂越えて奥でビショビショ、腹も下から着がえた。点検には出らんてよいか、加藤(大三郎士長)君と三人、捜査に行つてくれ」と命あり。八時三十分直伝車で赤水へ。(中略)鰐掛棚は赤水の突端である。波岡氏は土曜午後三時頃一人で鰐掛棚へ行き、リュウツクの雨衣羽が濡れてないところから、着くとすぐ落ち込んだものだろう

二八〇

と云う。第三鰐掛に土々呂分団旗を立て、土々呂分団(消防団)が三つに別れて捜査をはじめ。午前十一時新造船赤水丸が出、引つづき輝丸、海上自衛隊A H 13等が出動し陸海から捜査す。団員75名、市役所、親族、池上鉄工所など、日高邸には捜査本部がおかれ、折小野市長、高島助役、木戸議員等も見えた。午後五時三十分海上自衛隊の手旗信号「本日ノ訓練コレデ打ち切り、基地ニ向フ」で、当日の捜査を止め七時帰庁。六月十二日波岡氏の死体がある。』とある。

先年は塩浜町の某父子が日曜日、門川町さかい付近のトビエに鰐釣りに行き、子供の目前で父親が海中に落ち込んで帰らぬ人となつたこともあつた。

延岡付近には高山が少ないので山の遭難はないが、鰐釣りでの遭難は屢々発生する。土曜日曜のレジャーに釣りを楽しむのは健康にもよいので反対するものではないが、小舟に乗つて鰐釣りに行くのはどうかと思う。家人も決して喜ばないようだ。鳥野浦の消防団など日当敷千円にもなる大漁の日が、遭難救助や死体捜査のためにはずれたり、夜中

から命がけの救助に呼び起されたりし、その上、おれの一言も云わぬ人もあるなどと、小言話をよく聞く。

鰐釣りの士より末候に十分気をつけ、人の迷惑にならないようにしてもらいたい。

ポケット新聞社発行「リレー随筆集」にはこれに関連した太田義雄前団長の「涙」と題する随筆がある。

江戸時代の水害史

石川恒太郎編「五ヶ瀬水害の水害史」より

◎有馬氏時代、慶長十九年(元禄五年)(四一六・一四二・一六九二)の記録たる「国乗遺聞」によれば、洪水の状況を次の様に書いてある。

「^{おの}地形高千穂肥後境まで十五、六里はあり、又、梶子川梶子村迄六里、又、八戸川(今の北川本流豊後境まで八里右三河の奥山大雨降りぬれば三ヶ所の大川満水にて港口二ヶ所に落合ける。港口の幅五・六町の処水を吐ききらずして溢れる水は浜の山南、毛なし浜と云処を打越ゆる。御城

内より恒富、岡富、栗之名、浦々水にたゆる地第一なり」

これは、有馬氏が延岡城主であつた時のことを書き留めた事物で延岡にはなく有馬氏が転封して行つた備前興丸岡町に残っているのである。

◎牧野氏時代の記録によれば次のようである。(牧野家史による)

享保六年(西一七二二)七月三日より延岡大風雨に満水御損毛御届八月十五日差出、高一万九千六百六十八石八斗余

享保七年六月二十二日、延岡雨降、二十三日、二十四日満水にて御損毛御届、高三万六千五百二十四石六斗余

同九年八月十四日より延岡大風雨、十六日満水に付御損毛御届、九月三十一日御差出、高一万六千七百七十石余

同十年十二月御領分御損毛御届御差出、高二万二千五百七十六石余

これは水害による被害高を幕府に届出たものである。即ち享保六年から同十年までの五ヶ年間に蒙つた水害の損毛高は九万五千五百三十九石四斗余となる。この五ヶ年間に

二八一

享保八年を除いて毎年水害を蒙っている。その享保八年も満水こそしなかったが延岡城の土居石垣が崩れている。この被害高の程度を考えるに当時すべて石高で表わしているが石高というのはその土地の地力即ち日向と豊後、丹波で八万石であったが日向は今の東西日杵郡と宮崎であった。丹波及び豊後の二郡を除いて日向国内の石高は約三万石であったから、この五ヶ年間の水害による損毛高は、東西日杵郡と宮崎郡との二ヶ年間の生産高に当るわけである。

◎内藤氏時代、延享四年＝明治四年（西一七四七―一八七五）

内藤氏が若城平より延岡に来るや先ず洪水に対し左の如き規定をなした（旧記書抜）

寛延元年（西一七四八）八月十日

洪水之節御手当左之通り

一、船通路留出番難致候は問御番所共代り之者出勤迄は詰切被仰付候、但詰切御附可被下候

一、満水に而面々屋住に家族共難差置候は最寄之水付無之所へ乍計前広に可引取候、但本小路桜小路辺は御本城へ

可引取候、尤於御門出役之御目付寛に御徒目付へ相届御本城へ可被通候

一、退後候有之時之ため兼而助船被仰付置候右助船之儀は御船手より御城内へ桜橋迄三艘、北小路へは元町より三艘、新小路へは柳沢町より三艘差出候筈に候間一退後の面々も有之候はは乗船引退可申候尤船御詰後此度被仰付置候

右之趣被仰出候間支配有之面々は其支配方へも可被相違候。更に宝暦元年（西一七五二）七月二十四日に左の進示をしている。

一、洪水の節御家中未々迄居宅退龍越候はは宿致候様兼而左の寺地へ申置候様町奉行へ以手紙申遣す

北小路、浄菩提院、合曇寺、善正寺、祇園寺、新小路、光福寺、春日寺、光明寺

其の後洪水は年々あつたものと思われるが手許に資料がないのは遺憾である。

洪水資料 被仰出留書より

（延享五辰年＝西一七四八）

八月十日 御用人連名

洪水之節御手当左之通り

一、船通路留り出番難致候は問御番所共二代之者出勤迄は詰切被仰付候

但詰切中御附可被下候

一、満水に而面々屋住に家族共難差置候は最寄之水付二無之取江見計前広に可引取候

但本小路桜小路辺は御本城江可引取尤於御門出役之御目付并御徒目付江相届御本城江可被通候

一、退後し候者有之時之ため兼而助船被仰付置候右助船之儀は御船手より御城内へ桜橋迄三艘北小路江は元町より三艘新小路江は柳沢町より三艘差出候筈に候間一退後し候面々も有之候はは引退可申候尤船を詰役此度被仰付置候右之趣被仰出候間支配有之面々は其支配方江も可被相違候

以上

（寛延四年＝西一七五二）

七月五日 御用人中連名

本小路桜小路

一、穂鷹吉兵衛屋敷 一、三松勝右衛門前

一、長坂徳右衛門屋敷之間一、佐々三郎右衛門屋敷之角迄

一、赤井善兵衛門前より桜橋之辺迄

一、加藤勘兵衛門前より三松幾右衛門脇長馬場通り御長屋之辺迄

新小路

一、篠崎安兵衛御長屋之辺 一、連山治兵衛門前四ツ辻

一、三宅権左衛門屋敷前より組長屋迄

北小路

一、横田善左衛門屋敷前より赤坂平太左衛門前迄

一、太田金右衛門前より原田小左衛門前迄

一、大橋左七後御長屋悪貫式右衛門脇迄

一、合曇寺下御長屋より佐野五郎右衛門後通り右之所は満水

之節通船相成兼候兼而助船セ話役被仰付置段々相廻リ水
付候而他江退出くれ候面々は右船より相送候等ニ候得共
或は水勢早ク又は小路狭紀所有之右之分通船不叶候面々
其心得を以水高ニ不相成手廻し致引退可申候此段寄々可
被申通候

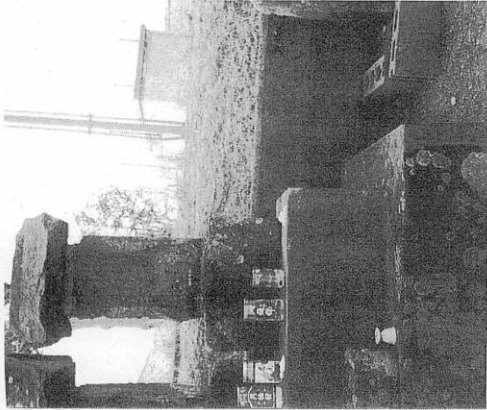
洪水之節御手当

- 一 本小路桜小路之面々滴水之節御本陣江退候様被仰付候如
此度御改左之通被仰付候
- 一 御在城之節は西曲輪御門下腰掛江家族引退可申候且又大
勢居重り風雨難免節は御座敷内江も御入可被成候其節ハ
御下知次第自分解を以御門出入可致候
- 一 御在府之節は御目置内往來御長屋御被成候若右場所江
も水附候品々□西曲輪江茂御入可被成是又其節ハ御下知
次第可致候
- 一 洪水之節通船不相成場所別紙御渡と成候水高ニ不相成内
手廻致退可申候右之趣共被仰出候間寄々可申次支配有之
面々は其支配方江茂可被申伝候

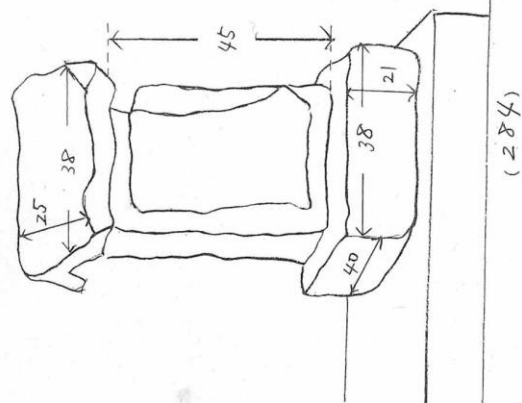
昨日於御用所ニ被仰渡候御書付式通御承知可被成候且又
北小路之御方最寄之寺院江茂寺社奉行中より兼而被申聞
置候御座候間難ニ無御座退候様御用番被申聞候

「20周年記念誌—延岡の石塔を尋ねて（第三次）—」延岡市郷土史婦人学級OB会ひみこ（H20）

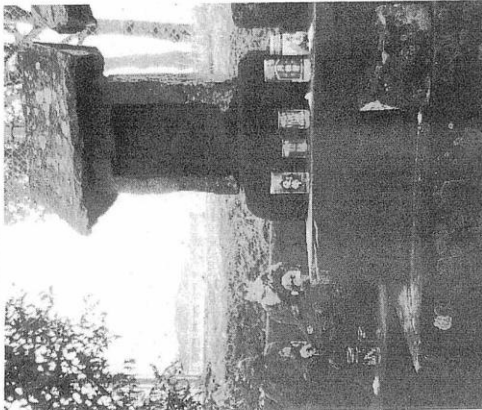
碑名	水神塔		
調査日	平成16年11月13日	類分	水神塔
		整理番号	159



所在地	延岡市 杣木田町 東海東小学校東側道路
建立期日	不明
	年（ ）月 日



碑名	水神塔		
調査日	平成16年11月13日	類分	水神塔
		整理番号	160



所在地	延岡市 杣木田町 東海東小学校東側
建立期日	明治十四年（一八一）日七月吉日

